

## 京都文教大学大学院文化人類学研究科シンポジウム (2018.11.10 (土) 於 恵光館)

### 「文化人類学研究科18年間を振り返るーフィールドワークの成果と課題」

学 長 挨拶

京都文教大学  
学 長 平岡 聡

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました学長の平岡でございます。本日は『京都文教大学大学院文化人類学研究科シンポジウム：文化人類学研究科18年間を振り返る、フィールドワークの成果と課題』にご参加いただきまして本当にありがとうございます。御礼を申し上げます。

私も開学当初からずっと先生方と一緒に歩んできた者として、沿革も眺めながら、大学の歴史を振り返ってみました。本学は1996年、今から22年前に、文化人類学科と臨床心理学科から成人間学部一学部の大学としてスタートをしました。ユニークな学科構成ということで、当時はいろんな方々の注目を浴びたように思います。

完成年度の2000年には、大学院の文化人類学研究科が開設されました。そして10年間以上その状態が続いたのですが、2012年には人間学部を総合社会学部へ名称を変更、それから翌年の2013年には総合社会学部に総合社会学科が開設されたことで、「文化人類学科」という学科名称は残念ながら消えてしまい、さらにこの度は文化人類学研究科も募集停止という決断に至りました。

私も開学から先生方と一緒にここで働いてきただけに、文化人類学科の名前が消えたことはもちろん、この度の文化人類学研究科募集停止という決断は、本当に断腸の思いでございます。私は文化人類学という学問を深くは知りませんが、非常に面白い学問だと思います。私自身、大学の3回生

か4回生のとき、ふらっと本屋に立ち寄ったら、『文化人類学の考え方』という米山先生の本が目に入り、なんか面白そうだなと思って買って読んだのを今でも覚えております。

ただ現在、日本の高等教育および受験生自身が実学や資格を志向するようになり、本質的に物事を考えるような学問に対して少し距離を置くような傾向が見られます。それにともない、受験生に文化人類学という学問の面白さをアピールできなくなったことが背景になって学科がなくなり、そして今回は研究科がなくなるという残念な結果に至りました。

安倍政権の政策を見ておきますと、人文科学に対する冷ややかな態度が透けて見え、「学生はちゃんと就職して税金払え。いらんことは考えるな」と言っているような気がしてなりません。その中で私たちがどうそれに対抗していくかということが今後の大学の課題となるでしょう。

文化人類学の人気は薄れた背景にはこのような事情がありますが、本学の文化人類学科および文化人類学研究科が果たした役割は非常に大きなものがあつたと私は思います。確かに「文化人類学」という学科や研究科の名前は消えてしまっていますが、本学の文化人類学科・文化人類学研究科が有為な人材を社会に輩出したという事実は決して消えることはありません。これはしっかりと本学の歴史に刻まれるでしょう。

それから文化人類学の重要な手法であり

ますフィールドワークは、本学が重視する現場主義教育の教育基盤に今でも据えています。来年度には基盤教育センターも立ち上がりますが、この文化人類学的な発想あるいは手法であるフィールドワークを、本学の新たな教育の核に据え、この文化人類学の精神を伝えて発展・継承させていきたいと思えます。

今日は松田凡先生のご講演、その後引き続きシンポジウムが開催されます。登場人物を見ただけでも本当に懐かしい思いでおります。先ほども話をしていたのですが、ちょうど1期生の方は非常に個性豊かな学生ばかりで、特に水口くん、今日も来ていただいていますけれども、開学1年目、上回生がいない閑散としたキャンパスで、普照館の3階の窓辺に腰掛けた水口くんが横笛を吹いていたのですね。静謐なキャンパスに響き渡ったその調べが、いまだに私の

耳に残っています。

それから1期生の森田くんも今日来ていただいています。高山先生について『チベット旅行記』の研究を志していたので、確か金曜日の1限目だったと思うのですが、私の研究室で彼にチベット文字の書き方や読み方を教えたのを覚えています。今となっては、懐かしい思い出です。

さて今日は、初代の研究科長でいらしゃった田中先生、それから西川先生もお見えいただいています。ありがとうございます。文化人類学研究科はなくなりますが、新たな形で文化人類学の考え方や手法を、本学の教育の中心に据えるヒントを得られたらと思います、今日、私は参加いたしました。短い時間ですけれども、皆さんにとって有意義な時間になればと思います。よろしくお願いいたします。

## 第1部 講演「フィールドワークと人生ーこれで終わった気になるなよ！」

京都文教大学・名誉教授  
松田 凡

松田でございます。今から1時間ほどお話をさせていただきます。最初に、こういう形でお呼びいただいても本当にありがとうございます。私はこの3月に退職をしまして、それ以来あまり人前で話す機会がありませんので、1時間という時間をうまく使えるのか自信がないような情けない状態ではありますが、頑張ってお話させていただきます。と思えます。

研究科長の金先生からお話があって、フィールドワークについて何か話をとということになりました。あれこれ考えまして、最初は旅と人生みたいな話を思いつきました。『山と人生』というタイトルの本があったなと思って柳田国男を調べたら、実はあれは『山の人生』。山とじゃなくて山の人生ですね。いわゆる「まれびと論」という

山に暮らしている人たちの一生に関する非常に面白い聞き書きです。そういうものでしたので、ちょっと私がここで考えていることと違うなど。では『旅と人生』という本を書いた人いるのかな、と思って調べたら、出てきたのは良寛さんでした。『良寛～旅と人生』というタイトルの本を松本市壽という方が2009年に書かれています。これは良寛作の短歌、俳句、漢詩を編集したものですので、副題で「旅と人生」とついていますけれども、私の話とはまた全然違う。案外フィールドワークと人生という括りは私にとっては当たり前だと思っていたのですが、そういうタイトルの本はないのかなと思ったのですが、やっぱり調べるとありました。しばらく前に京大を退官されました菅原和孝先生が『原野の人

生」の長い道のり：フィールドワークはどんな意味で直接経験なのか」というタイトルで日本文化人類学会賞を受賞された際の記念論文が2013年に雑誌『文化人類学』に出ています。ご承知のように菅原先生はずっとブッシュマンの研究をされてきた方なので、原野の人生、これを英語で言うとフィールドになるのかもしれませんが、むしろ柳田の『山の人生』に近いような内容になっているのかなと。ただ、あんまり難しく読んで分らない。菅原先生の本、だいたい難しくよく分からないので読みませんでした。ですので、別にそれを参考にしようという意図は今日はありません。

私がお話するのは、結局本学の文化人類学科それから文化人類学研究科、約20年の中でフィールドワークが教育に対して、また学生や教員の人生に果たした役割や影響について今一度考え直してみたい。先ほど金先生がおっしゃった主題を私はそのまま考えています。とはいえ、この後で研究科の修了生の方々それぞれの人生とフィールドワークについてお話しされるのかなと私は思っているので私はその露払いというか、さわりの話をちょっとすることにします。私は私で、私の経験したフィールドワークに基づく話をします。私はアフリカ専門でエチオピアを調査地としてずっとやってきましたし、それと授業としてはフィールドワーク実習ですね、大学院のほうもフィールドワークの実習という科目を後で作りましたが、それに力を入れてきたつもりですので、その私の経験の話をするしかないと思っています。

今日のタイトルが「フィールドワークと人生」です。「これで終わった気になるなよ」と副題を付けさせていただきましたけど、これは実を言うと、2013年に文化人類学科がクロージングセレモニーをするときに卒業生たちが記念行事を催してくれまして、そのときに臨床心理学科1期生で本学職員の立石さんがこういうTシャツをデ

ザインしてくれたりキャッチフレーズを考えてくれたんですね。Tシャツの背中には『人生はフィールドワーク』というタイトルになっておりますけれども。そのときのチラシに『これで終わった気になるなよ』という、これは立石さんの言葉であります。私、これずっとそのときから結構気に入ってまして、この講演の話をいただいたときもやっぱこれやなっていうふうに思いました。つまり、『これで終わった気になるなよ』というのはですね、まず第一には大学への多少の怨念を込めてですね。平岡学長はそこであらずいてはりますけど、これで終わった気になるなよというのが一つはありますし、その次には、卒業生それから修了生に対してです。組織としてはこれで閉じるわけですけれども、自分が学んだ文化人類学であったり、フィールドワークがずっと生きてくるとい話を後でしてくれると思っています。それから最後に、私自身が早期退職という形で大学をやめたので、自分自身へのエールとしてこの言葉はかみしめたいというふうに思いましたので、今日のタイトルの副題に付けさせていただきました。それで、今日私がお話をしようと思う主題は、フィールドワークにおける暗示的経験とにかかわるものです。フィールドワークの中でなかなか語られない情報というのが。経験に根差す情報と言ってもいいでしょう。つまり、研究とか論文にするためにデータとして集める情報というのが第一に大事ではありますけれども、それとは別に、そのフィールドワーカーのもっと人間的あるいは身体的な形成の中により関わる情報というのがあります。普通あんまりそういうのは公表しない。表立って言わないというのが暗黙の了解になっていると思います。しかしご承知のとおり、1980年代以降の「ポスト構造主義」という時代の中で、人類学的フィールドワークはそうした裏側の情報もある程度研究に活かしていくというやり方が出てき

ています。ただ、相変わらず友人とか先生との間でしか話れないような経験や、後から振り返って自分にとって、ああ、あれは重要な経験だったなって思うようなことが私にもたくさんあります。そうしたものの多くは、自分の未熟さや恥ずかしさ、青臭さとセットでありますので、おおよそ人に語るものではない、語れるものではないというふうに自制している部分というのは誰しもあるのではないかなと思います。

ただ、この大学でフィールドワーク実習や私自身が長年フィールドワークをやってきた中で、学生は研究者と違ってそうしたフィールドワークの中の語れない情報について思いも深いし、専門的、職業的な人類学者じゃないわけですから、そういったものを糧に彼ら彼女らが人生を生きていくというのは、それはやっぱり教育としてのフィールドワークの価値だと、私は言えるのかなと思っています。今日はそうした私の暗示的经验みたいなものも包み隠さずお話しする、などという勇気は到底ありませんが、幾重にもオブラートにくるんで、抽象化して、他人事にして話す。恥ずかしいことばかりではありませんし、語れることもあります。研究論文のデータとは違うというお話であります。それらのエピソード的なものを三つに分けてお話をし、できればその後パネルディスカッションの中で生かしてもらえればなと思っています。

その前に、私自身がどういう主なフィールドワークをしてきたのか、どんなところでどんなことをしてきたのかというのを拾ってみました。このうち全部を取り上げませんけれどいくつかの話が出てまいります。私はエチオピアの西南部のオモ川下流地域という所で、正式には1986年からほぼ毎年でもないですけどずっと調査に入っておりました。大部分は文部科学省の科学研究費をいただいたりしましたし、JICAの専門家という立場で行ったこともあり

ます。それから院生のときには、鳥取県西部の東伯地方、倉吉から西に広がる地域の調査を私が所属していた研究科の合同調査としてやっておりました。91年から94年ごろですね。そこは日本が国策としてものすごく広大な畑作灌漑地域を作った所で、その成果についての研究ということで、私の先生だった人たちが国から委託を受けられて調査をしました。それからタンザニアのドドマ地方の調査研究を、これも科研費でやらせてもらいました。さらに本学へ勤めてからは橋本先生、杉本先生、森先生らと、「地域丸ごと科研」とみんなで呼んでいましたけれども、今の地域連携とか観光研究につながる、基礎となる研究費を取って始めました。この時は遠野や湯布院、大洲、沖縄などで調査をさせていただきました。これは2003年から2006年です。それから滋賀県大津市の和邇地区というのが、文化人類学科のフィールドワーク実習で、99年、2000年ぐらいまでやったかと思えますけれども、森先生と合同でやりました。それから今度はエチオピアで実習をやろうと思って、最初はアフリカへ学生を連れて行く自信があんまりなかったのですけれども、西南部にある私のフィールドではなくて北部のラリベラという、13世紀のキリスト教遺跡で有名な世界遺産の町があるのですけれども、そこへ学生と一緒に行くようになりました。これが2003年から2007年と、それから2012年、2013年です。

実は、もうちょっとこの間にも実践実習とかいろんなものがあって、ほとんど10年以上何かの形で学生と一緒にラリベラに行きました。多いときは17人学生を連れて行きましたし、少ないときでも4、5人。今だから言えるのですが、臨床の学生も何人か行きましたし、学生のお母さんというのも一緒に行ったことがあります。なんかようわけの分からない実習だったんですけど。それから2年生のゼミで、滋賀県

の高島市の針江という所で最近はずっと授業をやっておりました。それから大学院では、最初のころは教員と学生がいっしょに行くフィールドワーク実習という科目はなかったと思うんですけど、私が大学院教員になってからこういうのもあっていいんじゃないかという話になってそれで始めました。最初私と橋本先生で岐阜県の郡上市八幡町で、2010年から始めました。これも先生方交代でやっていましたので、17年には私がもういっぺん担当しました。今日会場にいる中国人の留学生と一緒にいったというのがこれですね。

スライド上の表の一番下にあるのは、実習ではないのですけれども、ある意味フィールドワーク的な活動として、ずっと本学の学生課と宗教委員会主催で、2011年の東日本大震災のあった夏から福島県の相馬市、宮城県の仙台、石巻に、夏休みの短い期間ではありましたが学生さんと一緒に、学長も毎回一緒に行っていて続けた活動があります。私の中では期間こそ短いしこれで研究論文書くわけじゃないんですけど、フィールドワークの話に混ぜて今日はさせていただきますと思います。最近では、ご承知のとおり九州北部豪雨というのがありまして福岡県の朝倉市に行きましたし、熊本地震で被害を被ったのが熊本市益城町ですね、こういう所へも学生とともに行きました。それから今年2018年も、これはまだまだ続いているわけですが、岡山県の真備町で大きな水害がありまして、私はこの時すでに退職をしていたのですけれども、なんとなく血が騒いで、自分一人で日帰りではありましたが行きました。その後学生課からも声をかけていただいて、今年は学生さんと一緒に総社市へボランティアに行きました。この話も、少し今日の話に付け加えさせていただきますと思います。

これらのエピソードを題材に、フィール

ドワークの教育的意義を3つにまとめました。まず1番目に、①フィールドワークは人をおとなにする。これは、ほんとに私はもう従来から考えてきたことだし、フィールドワーク実習をやった学生たちを見て、やっぱり成長というのを一番感じるのはフィールドワークから帰ってきてから後だったと思います。それから2番目に、②フィールドワークは人に故郷を作る。故郷、つまり自分が生まれて育った所以以外にも故郷を感じられる場所を持つ。私はエチオピアも自分の故郷だと思っているし、私は今琵琶湖の東側に住んでいますけど、ちょうど琵琶湖の向こう側にですね、先ほど言いました和邇という地区があるんですけど、あそこを見る度にあそこも自分の故郷だというふうに思いますし、とにかく、フィールドワークに行った所は全部私自分に故郷になっちゃっているというお話をしたい。それから三つ目に、③フィールドワークは人と世界をつなぐものであるという、この三つに話は収斂するつもりであります。

最初に、フィールドワークは人をおとなにするという話です。この写真は1988年に博士課程に入ってから、エチオピアの調査、このときは2回目ですけど、これから私がフィールドへ行こうという峠の上からエチオピア西南部のサバンナを見下ろしたところ。私のフィールドであったクチュルという村はこの草原のはるかかたにあります。ここから南へ真っ直ぐ150キロぐらいの所がケニア・エチオピア国境です。それから、写真のやや右上、東方へまたやっぱり150キロぐらい行きますと、今度スーダン国境です。ですので、エチオピア、スーダン、ケニアの国境に近いような所で調査をしておりました。次の写真は私が調査したクチュルという村です。家が150軒ほどお椀をひっくり返したような草屋根の家が連なっている。サバンナの真ん中にある、病院や店やそういうもの一切ない、もちろん電気・水道なんか何にもあり

ませんが、そういう村に行ったときの写真であります。

ここからおとなの話なんですけれども、1988年、私が30歳の時です。このとき長期で1年半ぐらいいましたので、テントというのもしんどいということで家を村の中に建ててもらおうようにしました。家を建ててもらおうという簡単なようですが、でも当然誰もタダでは動いてくれませんので、おカネを払って人を雇って家を建てるという。私にとって人をカネで雇うという経験はこのときもちろん初めてです。日本で人に雇われた経験はありますが、でも、初めてカネを払って人に仕事をしてもらう。これは、今に至るまで私は大きい経験だったなというふうに思います。はっきり言ってもうトラブル続きってことですよね、カネで人を雇うというのは。村の人たちにはわれわれと同じような意味での契約の観念とかそんなものはおおよそありませんので、仕事が終わったらとにかく最初の額の数倍請求されるというのが普通です。それから、だいたい働いてくれないですしね。最初5人働いているはずやったのに、気が付いたら8人ぐらい仕事しているんです。3人は何しているの？と言うと、いや、仕事してるんやけど、そいつらカネ払わへんと言うわけにいかんわけですよ。だから毎朝点呼をして「今日はこれだけの人数な。」というふうに確認をしたりというようなことをやりながら、相当最初エネルギーを使いました。

それから荷物を運ぶ際にも問題が生じる。最初は1年半ぐらいの滞在でしたので結構大量な荷物を村まで運び込みました。途中までは車ですけどその後は徒歩で数十キロ運びます。30リットルぐらいのプラスチックの箱を6箱くらいと、当面の食料などを入れたズダ袋を数個。人を雇ってそれを担いでもらって持って行ってもらわないといけない。これもおおよそトラブルの種類になります。

次の写真は、女の人が頭にこの箱を載せているところです。アフリカのこの地域で、荷物を背中に背負子にして運ぶか、頭に載せて運ぶかというのは、民族集団によっていろんな物の運び方があるのですが、このニャンガトムという人たちは頭に載せます。男は荷物運びません。女性なんですね。頭に草で輪を作ってですね、天使のように。だいたい水のポット20キロぐらいあるのをみんな運びます。このときの私の荷物を頭に載せて、森の中を歩くときは膝で進むんです。そういうのを見るとですね、やっぱり少々お金を後で高くせびられても払わざるを得ないような気になります。

これは2013年にエチオピア北部のラリベラへ学生を実習で連れて行ったときの写真です。学生は楽しそうにピースしていますけれど、乗っているのはミュールといってロバと馬のあいのこです。これを一日借りて3000メートルぐらいの山の上までトレッキングに行った時の写真です。この両側にいるのはいわゆる馬子の人たちですけども、なかなかカネの話は難しい。最初に一頭当たりいくらで何頭という話を決めてから出発するのですが、帰ってきたら馬と馬子の数が増えているんです。「なんで？」と。「それ、乗ってへんやろ？」「おまえら勝手についてきたんちゃうの？」って言うんですけど、そういうわけにいかない。半ばけんかのようにして馬子とやりとりをするのですが、学生はそういうのをおそらく知らないと思うのですが、私は陰でそういうことに疲れ果てるというのが実状です。

この写真は年にエチオピアのこれこそ普通の人が行かないような所、エチオピア南部のシェルマ川の流域を歩いてみようという計画を立てて、1週間ぐらい雨季の最中に森の中、草の中をかき分けて進んだことがあります。友人2人と1週間分の荷物をラバを雇って運ぶ。すると途中で道が崩れていて、ラバが通れないと言われて、結局

は自分らで荷物を持ち直したりしながら、最後は当初予定していたお金の何倍か要求される。この時は役所絡みで裁判になりかねないような状況までいきました。でもずいぶんこちらも慣れてきまして、毅然とした態度を取るということもできるようになりました。

アフリカに行き始めた最初のころ、ケニアに1980年ぐらいに行ったときは町なかで自称ウガンダから来た大学生に声かけられて、自分は実は政治的亡命をしたいと。これからタンザニアへ逃げるので資金を出してくれへんかと。ケニアには京大の先生が多かったものですから、京大の誰々先生も出してくれたとか、向こうも知っているわけです。つついそうなるこっちも情が移ってお金を出したりして。後になってナイロビ事情に詳しい人に聞いたら、「ああ、そういう詐欺に引っかかったんや。」と言われました。大都会のアディスアベバやナイロビでだまされたことは学生にはしゃべったことないですけど、限りなくあります。

でも、それらの一つ一つが私をおとなにしてくれたと、正直そういうふうに思っています。なんで彼らがそうやって人をだまさざるを得ないのか。半分怒りがありますがその人たちが暮らす日常世界を考えると、その理解との板挟みみたいなものがあります。一方的に嫌だと思ったら、「もうその土地、二度とあんどこ行くもんか。」っていう気持ちになるでしょうし。でも、いいことばかりじゃないのも確かですので、板挟みがやっぱり人間的成長のカギになるのかなというふうにあるときから思うようになりました。

これらがカネにまつわる話ですね。同じく人をオトナにするという話なんですけど、私はやっぱりフィールドで人の一生に出会うのだと思います。これは論文のデータとして誰かのパーソナルヒストリーを聞くと

かっていう話とはまた別に、その土地で生きる人の人生に出会うってことはすごく自分に影響していると思います。

次の写真のこの青年、これは1988年のときに撮った、私のキャンプの最初は通訳代わりだったのですが、実際には彼はクチル村の間人じゃないので、さっき言ったニャンガトムという隣の民族集団の青年だったので通訳としてはまるで役に立たなかったんです。彼は当時犯罪者としてエチオピア政府から追われておりました。当時エチオピアはまだ社会主義国で、彼は近くの町の高校へ行っていたのですけれども、高校の同級生をケニア国境側へ逃がした罪でエチオピア政府から追われていたために、町から遠く離れて逃げてニャンガトムの村で隠れて暮らしていました。それで私のキャンプで仕事をしてもらっていたんですけれども、非常に優秀な男ではありませんでした。その後91年に社会主義エチオピアは倒れまして、93、4年ごろに新政府に移管をします。その混乱期を経て私が調査に再び戻ったら、彼はどうしているかというセキュリティポリスになっているわけですね。180度の転換ですよ。この前は警察に追われていたのに、今度は追う側に回っているわけですね。腰にピストルかなんか持って。その後彼はその小さな郡の知事にもなりましたし、それからさらに出世して大きなエチオピアの南部州の刑務所の長官になっていて、えらい変わりようやなという気がしました。でも、やっぱりエチオピアみたいな国でそういう社会的政変とか政権が交代すると、今までのテロリストは大統領になるわけですし、彼のように犯罪者として追われていたのが役人になるという、そのドラスティックな変化に私はやっぱり人の一生というものをすごく感じました。それが今、彼の顔を見るとそういうことを思い出します。

今度はまたちょっと違う男性の話なんですけど、2004年に学生を実習でエチオピ

アに連れて行って、エチオピアの小学校で日本の小学生の暮らしについて学生が報告すると、そういうプログラムをやっておりました。日本人の学生が皆それぞれのテーマで日本の小学生の暮らしを報告する。エチオピアの小学生が、5～60人くらい集まってくれました。そのときに通訳してくれたエチオピア人の男性スタッフがいました。

彼は、数年後にラリベラへまた私が行くといないんですね。どうしたかというと、イギリス人の銀行家の女性と結婚したと。かなり年配の人だったらしくて、いっしょにイギリスへ渡って、そこからお金をラリベラの自分の親族に送って、親族はそのカネをもとにタクシーを数台と安いホテルを経営している。最初は「へえ？」と思ったんですけど、そういう話というのは実はその後いくらでも出てきました。写真に写っている変な形の建物、レストランなんですけれども、これもラリベラの若い男性がイギリス人の女性にお金を出してもらってそれでこの奇怪な建物を建てたと。そういう話がいっぱいあるんですね。最近、ホテルを建てたという男性のケースは、相手が白人のおばあさんなんですけど、自分で歩けなくてラリベラへ来るのに車椅子に乗っていた。男性のほうはまだ30何歳なんですよ。そうやって彼らは自分の生きる道を切り拓いていくんやなというのが驚きであるとともに、しかしいわゆる世界の流動性とか人の移動とか、そういうものを強く感じました。それ以外にも、フランス人と結婚したラリベラ女性の話も聞いたことがあります。私が学生たちを連れてよく行ったレストランのオーナーですけれども、離婚してその離婚のお金をもとにラリベラでホテルを経営しているんです。いくらでもそういう成功談みたいなのがあって、ラリベラはキリスト教の聖地ですので、一般的にはキリスト教文化が根ざす古い町という

イメージでまずは誰もが行くわけですけれども、実際にはものすごく中身はドラスティックに動いているという、人類学の教科書のような感じを受けました。

さらに言えば、人の生きざまを教わるという意味で、フィールドで一番教えてもらったのは、偉い人は偉いということですね。正しいことを言う人は偉い。私がいたクチュルという、私たちとはだいぶ常識の違う人たちの村で、長年リーダーだったおじいさんがいます。当時もう80歳ぐらいだったと思うんですけど、1940年代のイタリアとの戦争の経験もあるという。演説もうまいし、みんなが一目置いているのがわかる。隣の民族にもその名を知られているくらいの偉い人なんです。このおじいさんの言動を見ていて思ったのは、とにかく国家の法律とかそういうものが及ぶ世界ではありませんで、ほとんど無法地帯みたいな村なんです。警察もありませんし。殺人事件もときどきあるし大変なとこなんです。でも、そういう世界だからこそ、自分が正しいと思うことを言うと必ずそれを正しいと言って認めてくれる人がいる。そういう意味でどこにいても、それは日本にしようがこのエチオピア平原の真ん中にしようが、人としてやるべきことは案外一つかもしれないなというふう思ったというのはこのおじいさんとの出会いなんですね。でもこのおじいさん、個人的にはいろいろと問題ありまして、町へ連れて行くと売春宿に入り浸っているとか、村でも酒を飲んで倒れて、最後は家から起きてこなくて死んでしまった。むちゃくちゃなところもあるんですけど結構かわいらしいおじいさんでもあって、私はひそかに理想の老後やなと思ってるんですけど。そういう人たちとの出会いもありました。

人の一生という絡みで言えば、このクチュルという村にいた間に人の死に数多く直面するという、これも非常に大きな私の中での経験でした。とにかくクリニックが



ないわけですから、何かの病気になってこじらせると亡くなるっていう人もあります。産後の肥立ちが悪くて子ども産んだ後すぐにお母さんが亡くなるという、日本でも昔はそういう言い方をしたというのは知っていましたが、現実にはそういうことが見たのはこの村で初めてでした。私も薬くれと言われてもですね、ビタミン剤ぐらいしかあげられないのがつらかった。ある日聞くと、うちの嫁さんはつい先日亡くなったという。それからH I V。こんな孤立したような村ですけれども、だんだんやせ衰えて死んでいく人がある。しかも、それは町で悪いことをしてきた旦那が先死ぬのではなくて、その奥さん、村から出たこともない奥さんが先にH I Vで亡くなったということもありました。

私が調査していた村のすぐ前をオモ川という大きな川が流れているんですけども、子どもがその川へ落ちて死ぬことがある。ワニがたくさんいますので、足を滑らせて落ちたらなかなか助けられないんですね。私も、子どもが落ちて今流されたっていうすぐその後に村に行ったことがありますけれども、親の嘆き悲しみというのは尋常じゃなかったです。それから写真に写っているのはカラシニコフというロシア製の自動小銃です。80年代末ぐらいからたくさんこういう物が入ってきて、酒によるけんかの時や、酔って暴れた男を遠くから撃つというので亡くなったこともあった。それから、隣の民族集団の男性に水浴びをしていた女の子が撃たれて亡くなった。まだその女の子は、12、3歳だったかな？ 私が呼ばれてなんとか手当てしろと言われてたんですけど、脇腹に直径3センチぐらいの穴が開いていて、ライフルで撃たれた後ですのでもうほとんど虫の息でしたので、治療せよと言われても何していいのか分からない、亡くなるのを見てるしかないっていう状況でした。こうした理不尽極まりない死と日

常に面している人たちだし、自分は日本という、もっと死が隠された世界から来ていますから、自分の親族ですら目の前で死んでいくっていう経験はそんなにはないわけです。人の一生の最期としてそういう理不尽な死の話をしてきましたが、人間にとって大事なことを教えてもらったなというのが自分のフィールドワークの実感です。長い人類の歴史の中では当たり前なことばかりなんですけど、日本ではおおよそ体験したことがなかったようなことばかりでした。

でもこうした悪い話ばかりじゃなくて、子どもがすごくかわいいとか、年寄りもものすごくかわいいとか、あるいは若者のエネルギーの爆発、ダンスとか見ているとその発散する姿。それからおおらかな性をめぐる話題ですね。こういうことも教えてもらった。人間にとって大事なことを知ってということがおとなになるっていう、当たり前の話ではあるとは思いますが、これが一番目のテーマです。

それから二番目のテーマです。フィールドワークは人に故郷を作るといえることですね。私は「いつも心にふるさとを」という言葉をよく思うんですけど、一日に一度はエチオピアのこと思い出したり、学生と行った和邇や郡上八幡のことを思い出したり、結構フィールドとして行った先のことを何かのときにふっと映像としてフラッシュバックするということがよくあります。それがまた自分の本当の故郷というものを見直すきっかけにもなる。私は、自分の父親の生まれが京都の美山町ですので、しばらく前から美山町へよく墓参りに行ったり親戚をたずねて行ったりするようになりました。

次の写真は大学院の実習をやっていました郡上八幡という岐阜県の中部の町です。ご承知の方はよくご存じだと思いますが、夏の7月から9月にかけて、40夜ぐらい盆踊りを延々とやるので有名です。これは

ぜひ見る価値があると思います。橋本先生と最初始めたときも、それを題材に行った所です。その郡上踊りに加えて、水の町としても有名です。まちの中央を流れている吉田川という、長良川の支流ですけど、ものすごくきれいな川です。この橋の上から郡上八幡の子どもたちが13メートル下の川へ飛び降りるとというのがよくテレビで話題になったりする、そういう町です。ものすごく地元愛の強い人たちの多い城下町で、そこで大学院の実習をしておりました。夏の郡上踊りのシーズンになると、古い町並みのあちらこちらでいろんなフシギに出会う。ある日、夕方からいつも行きつけの酒屋の軒先で酒を飲んでいたら、前をひょっとことおかめの踊りの一群がずっと通り過ぎていくなんていうこともありました。そういうことがごくごく普通に夏になると行われています。

写真に写っている男性は小木曾君といって本学の卒業生です。彼が郡上八幡の振興公社という所に勤めていまして、彼にいろいろアテンドを頼んだり町の中の解説を頼んだりして、もともと彼がいるので郡上八幡で実習を始めたという経緯があります。彼は民音という民族音楽のサークルをやったり、1年間休学して中南米を自分で歩いたりして、卒業後は旅行会社に勤めたんですけれどもそこを辞めて郡上八幡の振興公社の公募に応募して、臨時採用から入ったという人です。なんで郡上八幡なのかと聞くと、彼は郡上八幡にほど近い多治見の生まれで、子どものころから郡上八幡が好きで、中学生ぐらいのときはそこまで電車で行って川で泳いだり、あるいは高校になったらキャンプをしに行ったりしていたのだそうです。そのうちにだんだん自分がここで働くということがごくごく自然に思えるようになってきたということでした。地元愛っていうと、郡上八幡生まれのすごく熱い人たちは多いですが、案外外から郡上が好きで来て、そのままこの町のために働

いたりしている人も結構多いというのが特徴です。そういう意味でも、小木曾君に代表されるような第二のふるさと、第三のふるさとと人との結びつきっていうのを強く感じたというのが郡上八幡でのフィールドワークでした。

ところで「災害とふるさと」という話は東北震災の話で、皆さんもよく聞かれたと思います。とくに原発の問題があって帰れなくなった人たち、津波でまちを流された人たちです。80年代ぐらいから人類学の本の中で、近代化というのは人と土地と文化という今までワンセットだったものを切り離していくプロセスだったという議論があって、先ほどのラリベラの居住と移動という話はそれに当てはまります。けれども、こうして日本でフィールドワークをしているなかで、人と土地と文化の結びつきが逆に強くなっている側面もあるという実感があります。フィールドワークは人にふるさとを作るって言いましたけれど、自分が生まれて育った所でもなくてもいいわけです。そういうものをやっぱりは求めているのかなっていう気がします。デラシネっていう言葉がはやった時代もありましたが、今はどちらかと言えば根っこを求めるという逆の流れもあるというふうに感じました。

さらに言えば、故郷を意識するというのは、一方で文明批判の意識を持つっていうことでもある。柔らかく言えば、本来あるべき人間性へのまなざしを意識するということだとも思います。本来の人間性、それは自然というふうに言い換えてもいいと思いますけれども、そういうものへのまなざしをフィールドワークによって持つようになったというのが私の実感するところです。

フィールドワークは人と世界をつなぐというのが三つ目のテーマです。写真は2007年にラリベラの小学校で実習を行ったときのものです。ラリベラに小学校の校舎を建てるというプロジェクトでした。こ

これは京都文教大学のホームページやパンフレットを作っている会社の勝谷さんという人が一緒にラリベラまで来て撮ってくれたいい写真なので、今日使わせてもらいました。次の写真は2012年ですけど、11年の夏から福島県の相馬市へ復興ボランティアとして学生とともに行きました。相馬の松川浦という所でイチゴ栽培農家のお手伝いをしています。みんなでイチゴを栽培するための道具の掃除をやったりしています。こういうのもずっと何年もやらせてもらっています。

こちらの写真は2017年7月の九州北部豪雨で被害を被った福岡県朝倉市ですね。大学から同じく還愚セミナーとしてボランティアに行きました。左側に映っている木造の家屋で完全に泥につかった家の泥のかき出しをやりました。すぐ目の前に川があって、屑鉄の塊がある。これ一瞬何かな？と思って近くまで行ってよく見たら、スピードメーターが見えたので軽トラックみたいだということがわかった。上流から流れてきたんでしょう、完全にまん丸の塊になっています。この川のすぐ際まで家があったんですけども、果たして建て直して住むということができるとどうかわからないような感じがしました。

こちらは2016年4月に起きた熊本地震で被害を受けた熊本県の益城町ですね。家があまりひどく崩れている所はあえて写しませんでしたが、元の居住者の方に案内してもらって行きました。ここは山の斜面にあったので重機も入れないですし、村を挙げて放棄ということになるだろうというお話でした。そこに人が住めなくなることの不幸に対して、どれだけ僕らは想像力あるいは共感力を持って自分の痛みとして感じられるか。テレビのニュースをなかなか見ただけですっとなってこないところがあるんですけども、こういう所へ一度行くと体が反応するようになる。その後テレビを見ていても、今年の例で岡山県真備町

の映像を見るとそれが思いやられて、私もいてもたってもいられなくて一人で7月に真備町へボランティアに行きました。これもフィールドワークの中の想像力・共感力という辺りですね、重要なキーワードなのだと思います。

こちらは2017年に実習でいったエチオピアのラリベラの旧市街なんですけど、ここに住むおばあさんに話を聞くと、観光開発で今のこの家並は全部立ち退きなのだそうです。もう多分今ごろはないと思います。古くからのラリベラの町並みは全部きれいに観光道路になって、ユネスコ世界遺産の教会群へ向かうための公園として整備されるということでした。若いもんは郊外にできたニュータウンに移住したほうがええやろうけど、自分はここで毎朝5時に教会のお経がスピーカーで流れる、それを聞きながら目覚めるのがええんやとこのおばあさんは言って、ものすごくさみしそうな表情でした。

これは私の写真ではなくてネットから取ったんですけど、私が調査していたエチオピア西南部のオモ川の上流にギベ第3ダムという、これはナイル川のアスワン・ハイ・ダムに次ぐ大きなダムが近年できました。最近現地に行った友人の話を聞くと、下流はものすごい飢饉になっていて、私のいた村なんかもいずれ立ち退きというのは目に見えているという話でした。いわゆる開発独裁と離散ですね。これは政治的な理由とか開発による理由とかいろいろあるんですけども、そういったものの痛みが想像されて、自分のフィールドへ行くのが怖い。青い川の流れが干上がって、かつて暮らした川辺林も全部枯れているのではないかなと思うんです。

今日はあまり貧困の話はしませんでしたけども、フィールドワーク実習に連れて行った学生がまず第一にエチオピアのアディアベバの町の中で、ストリートチル

ドレンにお金をねだられて怖くて逃げるということがあります。それでまずはアディスアベバで学生を解き放つというのをやっていますが、あれなんかは一種のショック療法ですね。一度そういう経験をすると、それが中南米のどこかの町であろうが、アジアの町であろうが、あるいは日本の中にも最近では貧困というのが重大な問題ですので、そのことへの想像力・共感力を養ってくれたのではないかなと思っています。よく言われるように、多様性を認め合う社会を目指して私たちは文化人類学教育をしています。そのために何ができるのか、その中にやっぱりフィールドワークの経験っていうものが非常に大きいのではないかなというふうには私は感じて今日のお話をさせてもらいました。

最後の写真は2006年のオープンキャンパス、これはフィールドワークと全然関係ないんですけど、外国人がたくさん写っている写真がないかなと思って手持ちのスライドを探していたんです。パッと見たら、私の知り合いのケニア人のドラマーが来てうちの大学でオープンキャンパスのときにパフォーマンスをやってくれたので、これがいいかなと。ちょうどキング先生が映っ

ていらっしやるんですね。その向こうにアラブ人みたいなのが一人いますよね？だから、アラブ人もいるからちょうどいいんじゃないかというんで。

私の話はこれだけであります。まとめとして、最初に言いましたようにフィールドワークは人をおとなにする。苦い経験もする、でも人の一生に出会う、人生にとって大事なことを教わることで人はおとなになるのだというのが一つ目。それから、ふるさと。これは複数ですけど、複数のふるさとを持つ。そこに本来あるべき人間性へのまなざしが生まれるんじゃないかというのが二つ目。三つ目は人と世界をつなぐということで、まだ見ぬ人びとや暮らしへの想像力・共感力を養う。人類学のこれは Motto だと思いますけど、相対的視点を身につけるといのがフィールドワークを通じてわれわれがやってきたことだし、これからもやっていかなければならないことじゃないかなというふうに思っています。ちょうど今50分になりました。つたない話でほんとに恐縮ですけども、皆さんの中に何か喚起するものがあればというふうに思っております。どうもありがとうございます。

## 第2部 シンポジウム

### 「文化人類学研究科18年間を振り返る」フィールドワークの成果と課題

【司会】 遠藤 央（京都文教大学・総合社会学部・教授）

【シンポジストならびにフロアからご参加の皆様】

水口 良樹（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

小林 智（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

水井 久貴（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

佐藤 量（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

保科 政秀（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

笠井みぎわ（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

田中真砂子（京都文教大学大学院文化人類学研究科・初代研究科長）

森田 剛光（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

稲垣 諭（京都文教大学大学院文化人類学研究科修了生）

## 遠藤：

それではシンポジウムを始めたいと思います。90分ですが、ざっと3部構成で考えていまして、30分ずつ、3部ということで、まず、最初は学部時代の、必ずしも文化人類学を学んでこなかった人も大学院に進学していますので、その卒論などがあつたらその内容と、大学院進学のも機。これ、自己紹介も兼ねて短く話していただくと思います。それから修士論文のテーマというのはどういうふうに決めたかということです。いろいろなユニークなテーマがどんどん出てくると思います。それから真ん中のところでは、大学院での勉強と修了後の進路の関連について。それがどう大学院での勉強が役に立ったのかということを取り上げたいと思います。最後に先ほどの平岡学長のスピーチでも出てきましたが、最近、人文社会科学系の学問では厳しい環境が続いていますが、「役に立つ」という言葉が前面に出てきているのですが、「役に立つ」というのはどういうことなのか、別の指標はないのかということをお話していただきたいと思います。今年ノーベル賞を受賞した本庶先生が、その前に京都賞を受賞された時にスピーチを聞きに行ったんですが、その時に本庶先生は、「好き勝手やらせていただいて、妻に感謝しています」という、ノーベル賞の時も同じことを言っていて、ジェンダー論的にはこれは問題があると授業では言うのですが。その時に工学系の受賞者が記念スピーチの最後に、自動運転関連の研究なんですけど、私の研究は役に立ちますと堂々と宣言していました。やっぱり使うのだなということをしみじみと思ったんです。その役に立つというのを、短期で考えるか、長期で考えるかということが必要なというふうに思いますので、これをキーワードにして、いろいろと語ってもらいたいと思います。それではまず最初に自己紹介を兼ねて、進学のも機というものを水口さんから。

## 水口：

1期の水口です。私は京都文教大学が開学する以前から、そもそも文化人類学に興味がありまして、アボリジニの話だったり、当時まだ流行っていたカルロス・カスタネダの呪術師の本などを結構読んでいたりしてました。それでなんとなく人類学おもしろいなと思っていたところに、ちょうど京都文教大学開学っていうのが来て、「ああ、これだ」って思ったという意味では、たぶん学生、1期生の中でもかなり特殊な部類だったんだろうなと思います。

とにかく1期生だったので、大学に1年生しかいないっていう状態で、先輩もいないので高校の延長のようなノリで1年目は5時間目まで全部授業みたいな勢いで時間割を埋めてね、初年度、ばかみたいに単位を取っちゃうみたいなことにみんななっていたりしていましたね。で、僕はやっぱり宇治に一つしかない大学だとか、日本で唯一の文化人類学科だとか、そういうものを自分は担っていく人間になりたいなという、そういう複合的な希望と、やっぱりこれからの自分に対する根拠のない可能性のようなものを夢見て、この大学に入ってきました。で、実際入学して、例えばフレッシュマンキャンプとかに参加すると、朝、起きてトイレに行くと日野舜也先生がパンツ一丁で「おはよう」ってにこやかにやって来られて、「やっぱアフリカ研究の先生って全然違うんだなあ」とか、ほかにも夜遅くまで外で先生方と懐メロを歌って盛り上がっていたところに、ほかの先生が「こら、いつまでやっているんや」と怒りに来たら、今まで一緒に盛り上がっていた先生方がさっといなくなって、「なるほど、これがフィールドワークを生き残る秘訣なのか」っとか。そういうところまで含めて、本当にいろいろ学ぶこともあり、何より本当に温かく僕たちを迎えていただいて、やりたいようにさせてもらったと思います。

僕自身はもともとラテンアメリカに興味

があったので、ラテンアメリカやりたいって思って入ったんですが、いろんな面白い授業に出会って行く中で、あっちに浮気、こっちに浮気みたいな感じでね、こんなに面白いことがあったのかって思ったら、しばらくそっちに入り込んだりとかしてました。で結局、大学3年生の時に1カ月、ペルーのクスコっていう町に、ほとんどその町だけに1カ月滞在したことによって、やっぱり南米、ペルーやろうっていう初心に戻って、卒論ではそのことをやったんですね。

その滞在したクスコって町はインカ帝国の首都があった場所でもあったので、非常に古い、いわば京都みたいな古都なんですけれども、そこは先住民文化が非常に豊かで、音楽的にも非常に奥深く面白いんです。だけど、観光客に向けては、クスコ地方の地元音楽じゃなくて、隣のボリビアの民族ポップを聴かせて自分たちの音楽は聴かせていないんですよ。で、実はそこに非常に根深い差別構造があったりとか、ステレオタイプ的な観光の消費みたいなものが複合的に絡み合っている、そういうことに初めて行った時に気付いて。でも当時、卒論ではそんなことをとても扱えないながらも、無理を承知で自分の体験と直感をたよりに貧弱ながらも文献やインタビューで肉付けして書きました。そういうのがきっかけで、やっぱりもっと学びたいって思って大学院に進みました。じゃあ次を小林君。

小林：

大学院は2期生の小林と申します。学部は水口君と同じで、文教大学の1期生です。2期生になっているのは、1年、期間が空いています。学部の卒論では、グアムとかハワイとかバリとかかな、南洋諸島の観光におけるイメージがどういうふうにつくられたのかとか。三つの地域における消費されるイメージがどのように違うのかっていうことを比較研究しました。このこと

は、そのあとの大学院に入る動機とも関連してくるのですが、進学のかっかけは二つありました。一つが、野外調査実習ってのが学部の授業でありまして、これは遠藤先生にお世話になって、グアムに行ったんですけど。散々たる結果で。調査先では非常に先生に怒られ、テーマはまとまらないというような、非常に苦い経験になりました。ただ、この授業の中で一つ得られたのは、遠藤先生に厳しくいろいろと、報告書をどう直すんだとか、この内容はなんなんだということと言われながら。一つのテーマを自分で決めて、それに対して調べて、考えてまとめるということ。これが非常に面白くなっていうことが一つありました。もう一つが、大学院では、またあとでお話しさせてもらうと思うんですが、テーマを変えています。私自身サッカーを中学、高校とやっていました。今でもワールドカップとかをみていますと、国ごとに状況が違う。その状況がなんで違うんだ、何が違うんだらうかということにすごく関心を持っていました。ただ、この文化人類学という学問の枠組みで、それを研究していいものなのかどうかということに悩みがありました。観光も同じなんですけれども、そういうものもテーマにできるっていうのがこの文化人類学にあるということで、自分が持っている疑問を解決していきたいということも進学のきっかけになっています。それと、さっき言ったもう少し自分でも考えをまとめていく力とか、考える力を身につけていきたいということで大学院に進学したということです。

水井：

水井と言います。こちら、3期って書いてあるんですけど、私と隣の佐藤は4期で入学しています。私は、この大学、学部は違うところから来まして、学部の時は歴史学を学んでいました。歴史学を学んでいて、もう少し勉強を続けたいなと思って、「民

族」とかそういったものに興味があったので、そういったことを学べる分野について先生に相談に行きました。でも、自分が所属していた歴史学のゼミの先生にはなぜか相談しなくて、別の授業で親しくなった社会学の先生に相談したら、「それだったら、あなたがやりたいことは文化人類学じゃないの？」って言われて、それでちょっと文化人類学を調べてみたんですね。偶然にも1年生の時、この大学でいうところの「初年次演習」のゼミの先生は文化人類学が専門の先生でした。そのこともあって、一般教養科目のその先生が担当していた「文化人類学」の講義も一応取っていましたし、久しぶりにその先生の研究室を訪ねて相談をしてみました。そして、「それだったら文化人類学でフィールドワークをしながら、あなたのやりたいことはできるんじゃないか？」ということで、文化人類学を学べる大学院への進学を目指すことになり、その先生が受験にむけた勉強を見てくださることになりました。私は出身がもともと関東なので、関東の方の大学に進学することも考えたんですけど、先生と相談していく過程で、「京都文教大学だったら全員文化人類学の専門家だから、あなたが大学院で学びたいことと同じフィールドの先生が居なくとも、誰か面倒を見てくれる人はいるだろう」ということで、「とりあえず受けてみたら？」ということで受験をして、見事合格しました。見事合格したのはいいんですけど、その時のこと、今でも痛烈に覚えているんですけど、「秋入試」の受験生が、僕1人だけだったんですね。向島駅からバスに乗って、大学で降りたところの目の前に「臨床心理学研究科の受験会場はこっち」って書いてあるんですけど、「文化人類学研究科」のことは一言も書いてなかった。それで当時、入試センターが常照館の1階、今の、法人事務局のところにあっただんですけど、そこに行ったら「ごめんなさい、こっちです」って言われて、そのまま

普照館に連れていかれて「はい、ここで待ってください」って言って、その方が机を動かしはじめ、「準備」をする姿を非常に痛烈に覚えております。それで無事に入学できた訳ですが、入学式後の研究科のオリエンテーションで「2カ月後に京都文教大学で日本民族学会の全国大会があります。手伝いよろしく！」と言われて、文化人類学がなんなのかが分からないまま学会の準備をするということになりました。

当時、僕はそれぞれの校舎の名前も分からないまま、「学会があるから準備しなさい」って言われたのをすごく痛烈に覚えています。その時は、小林さんも「研究生」として研究科に在籍されていたのですが、研究室にいる院生や研究生が一丸となって「総動員」でその学会の運営に向けて準備をしたという出来事がありました。それが大学院に入学して最初の思い出ですね。私の指導教員は鶴飼先生でしたが、フィールドは沖縄でした。さっきから繰り返しますけど、「文化人類学とはなにか？」が分からないまま入学していますから、「とりあえずフィールドへ行け！」って言われても、訳が分かりません。その「フィールドワーク」の準備を鶴飼先生にゼミの中で説明すると、「なんだ、これは！」と言って、どこが悪いのか、駄目なのかかわからないまま、めちゃめちゃ怒られるわけですね。それで、だんだん嫌になってくるんですけど、「とりあえず沖縄へ行け！」ということなのでとりあえず行きました。それで、これもまた痛烈な思い出なんですけど、お金が無かったので、フェリーで行ったんですけど、フェリーに乗って沖縄に向かってる間に台風が発生して、那覇に到着すると同時にその台風も上陸するというような状況に遭いました。それで急遽、まず荷を降ろせる宿を探さなければならなくなった。那覇に着いたのは朝6時くらいなんですけど、とにかく、その暴風雨の中では移動ができないので「宿探し」をする羽目に

なったわけです。宿を探すんですけど、台風が来て飛行機も欠航になって、みんな足止めされているから、どこも「空き室はありません」なんて言われるんですね。それですが、その思いで那覇市の観光協会に行つて、そこで教えてもらったのが、当時那覇で流行りはじめていた「ゲストハウス」という業態の宿泊施設でした。今でこそ、京都にもいっぱいあって、増えすぎて「観光公害」とか言われて問題にもなっていますが、そういったものが那覇を中心に当時沖縄県内に増えてきていた時代でした。当初は沖縄に行つて、「民族」のこととか「国家」のこととか、すごく崇高な「ジ・アカデミック」なものを研究しようと思ったんですけど、そのゲストハウスに集う人たちを見ていると、いろいろな人がいて、すごく面白かったんですね。沖縄から帰つて鶴飼先生にフィールドワークの報告をした時に、「ゲストハウス」という宿泊施設のことや、そこにはいろいろな人がいてとても面白かったことを話した。そして、「できれば、これを研究テーマにしたいと思うんですけど、どうでしょうか？」って言った時の鶴飼先生の嬉しそうなお顔。それが非常に印象的でした。そして、「ゲストハウスが修士論文の研究テーマでもいいんだ」と、その時「文化人類学」という学問の懐の広さを感じたことを覚えています。そして、そこからゲストハウスの研究をし始めて、最終的に修士論文を書きました。

ここに多くの皆さんもご存じかと思うんですけど、修了後はそのまま3年間、教務補佐としてこの大学でお世話になりまして、今も職員としてこの大学で働いています。なので、もう15年ぐらいこの大学にいます。そこでの大学職員としての仕事の中で、やはりこの大学院で文化人類学を学んだ2年間、わずか2年間しかないんですけど、その中に学会があったりとか、フィールドにもトータル3カ月、4カ月ぐらい行きましたし、そこで出会っ

た人たちと話したことってというのは、すごく今でも痛烈に覚えている。先ほど、松田先生の話の中にもありましたけど、やはりこう、京都が第2の故郷だとしたら、沖縄はやっぱり第3の故郷ぐらいの思いで、やっぱり1週間、毎日思い出さないですけど、やっぱりちょこちょこ沖縄のことを思い出しますし、今は報道とかでも沖縄のこと、あまり良くないことの報道が多いんですけど、そういうのが出てくると、「あそこ、フィールドワークに行った時にバイクで通ったな」とか、「あそこで出会ったおじさんとか元気かな？」とかいうのはよく思い出したりします。今、大学の地域連携事業の部署にいて、地域の人と話することが多いんですけど、そういった機会にやっぱりフィールドワークで培った傾聴力とか、あとは調整力っていうのが大学院で学んだ学びとして今に活かされているのかなと思います。

#### 佐藤：

佐藤と申します。よろしくお願ひします。私は本学を修了してから立命館大学に進学をして、現在は立命館大学で講師をしております。大学院に入った時のことを思い返してみると、私は学部時代は文学部で日本文学を学んでいたことから、指導教官を西川先生にお願いすることになったのですが、西川先生との出会いが私の研究者人生の出発点でした。文化人類学というものをまったく学ばずにここに来た人間に対して、西川先生は手取り足取り厳しく指導していただいて、その時の経験が私の基礎になっています。私が今でも研究を続けられている一番の要因は、やはり西川先生との出会いがあったからこそだろうと思います。大学院で学び始めた当初、私はどちらかと言うと内気なところがあったので、インタビューをするとか、文化人類学的なフィールドワークをすることはまったくイメージが湧きませんでした。文学を学んでいたこ



ともあって、どちらかと言うと本を読むことのほうが好きでしたね。それに対して西川先生は、まずは外の世界に目を向けさせようと、フィールドワークの初歩的な手順として、インタビューのアポイントメントを取る電話のかけ方や、手紙の書き方、インタビュー時の作法、そしてフィールドワークから帰ってきてからの資料整理など、丁寧に教えていただきました。大学院のもっとも初期の段階で、文化人類学という学問のアプローチの仕方や研究者になるための心構えを教わったことは、とても貴重なことでした。現在私は教える側の立場になっていますが、大学院で学んだ時のように学生に伝えられたらと思っています。

#### 保科：

保科と申します。よろしくお願ひします。12期生ということらしくて、ごめんなさい、自分が何期生か全然分かっていなくて。私は、学部は臨床心理学部なんです。臨床心理学部で4年間勉強させていただいて、そのあと、文化人類学研究科のほうに入りました。学部時代というか、そもそも大学に入った理由っていうのが、あまり格好いい理由がなくて。勉強がとにかく高校時代したくなくて、とにかく喋っていたらなんとか通るだろうというところで探したら、たまたまAO入試があって、面接と小論文で試験があるっていうことで、うちの母親とその当時通っていた塾の先生が見つけてきて、それで大学に入ったっていうのが最初のきっかけで。だから臨床心理学自体もものすごく何か勉強したいっていうよりは、とにかく大学受かったし行ってみようっていうような不純な動機で入ったのが最初です。ただ、臨床心理学を勉強する中で、何か1冊ぐらい本を読んでおかないと、と思って読んだのが、河合隼雄先生の『臨床心理学概論』っていう本だったんです。その中に、のちのち考えると、それが自分の大学院に進むきっかけの一つだったのか

な、心の中でどこか引っかかっているものがあつたんだなと思ったんですけど、必ずその先生の本の中には人間学について書かれている文章があつて、その中にはこの大学の臨床心理学とか、文化人類学とか、現代社会学、そのトータルの学問がすべて人間学につながるっていうようなことが書かれていたんですね。当時、僕が臨床心理学科に入ったころは臨床心理学部ではなくて、人間学部だったんです。だから自分自身はこの大学に来ると、カウンセラーっていういわゆる専門的な勉強だけじゃなくて、文化人類学であつたり、現代社会学であつたり、いろんな人間に関することが学べるだろうっていう、どことなくそういう期待もあつて入りました。実際、学部に入ってから何をしていたかという、授業は全然出しておらず、最後卒業する時はギリギリの単位で卒業をし、なんとか大学院にも入らせてもらったんですけど。今日、皆さん、たぶん通ってはりますけど、ロータリーの大島徹水の像に夏は虫かごをかけて怒られまして。ちょうど学長が、当時の学長の時のような俳句を作つて、ポスターを貼つてとか、そんないたずらばっかりをやっていた学生でした。

ただ、自分が文化人類学研究科に入ろうと思ったきっかけの一つでは、この大学自体そんなに学生も多くないので、横のつながりがすごくたくさんあつて、お隣の文化人類学科の学生さんたちと交流する中で、地域に出て、それこそエチオピアにフィールドワークに行つたりとか、京都の宇治で研究したりとかしている学生さんたちが、すごくキラキラ見えたっていうのがすごく印象に残っています。自分の中で就職するのか、大学院に行くのか、いろいろ考えた中で、大学3年生の時に、文化人類学科の森正美先生と出会って、小学校でイベントをやると。給食が出るから食べに来ないかって誘われたのがきっかけで、給食につられて小学校でイベントさせてもらっ

て、その体験がすごく楽しくて。文化人類学って学問的なことは全然分からなかったですけど、地域にすごく根ざして、入って行って、その中で学ばれたことを実践しているっていうのがすごく魅力に感じて、もう少しその辺りを勉強したいなと思って、大学院のほうに進みました。大学院では鶴飼先生が指導教員ということで、最初1年間は、まちづくりのプロジェクトをずっと活動でやらせていただきながら、鶴飼先生に指導をしていただいたってことで並行してやっていたんですけども、なかなかフィールドワーク先が決まらなくて、自分自身がもともと、これを研究したいと思って入ったわけではなくて、もう少し活動がやりたいし、もう少し学生生活を過ごしたいっていうのもあって入ったので、なかなか決まらず。たまたま鶴飼先生がお知り合いで、奈良の高取町、飛鳥のほうなんですけども、そこの方と「知り合いやから、1回見学に行ってみるか」っていうところに行かせてもらったのがきっかけで、そこでいわゆるまちづくりの研究っていうのをさせてもらうことになりました。後ほどの第2部の話になるのかなと思うんですけど、実は今はそのフィールドワーク先の高取町で就職をしまして、仕事もやらせていただいています。先ほど、水井さんが同じ鶴飼先生から指導を受けられて、鶴飼先生が喜ぶ顔を見たとおっしゃったんですけど、僕はあんまり見たことがなくて。

最後、修士論文を書いて、最後、提出するっていう時に鶴飼先生から一言、お前は夏の時のフィールドワークから無理やりでも帰したらよかったって言われて、それぐらいちょっとどっぷりはまりすぎて、当事者のようにすごく動いていたっていうのが大学院のフィールドワークのちょっと思い出です。またよろしくお願いします。

笠井：

笠井です。聞こえますか。大丈夫ですか。

私も文化人類学の出身ではなくて、他大学で英文学を研究していました。英文学を勉強していた時に、ずっと本を読んで、書物と向き合ってたばかりで、あまり人と会話をしなかつたということに思い当たりました。それから就職をした時に、本当はずっと衣服ですとか装飾品ですとか、そういうものに興味があったことに気づいたのですが、そういうことを学問として研究できるのかがわからなくて。その時に知り合いの方に、京都文教大学に杉本先生という先生がいらっしゃるということ。そして杉本先生がインドの染織品を文化人類学として研究していらっしゃるの、お世話になったらどうですかと勧めていただきました。その時に初めて文化人類学という学問があるのを知ったぐらいで。先生にお会いしたのが確か秋だったと思うんですけど、それからすぐに受験勉強をして。本当に全然分からない名前ばかりで、恥ずかしい話なんですけどレヴィ＝ストロースとか誰だろうみたいな感じで始めて、なんとか入学しました。私はイタリアで舞台用の衣装を製作する工房でお手伝いをしたことがあって、杉本先生にはこの大学に入学した時に、刺繍が大好きで、なんとなくパレスチナの刺繍とかきれいだと思うんですけど、全然、アラビア語を勉強したことがないんだったら、海外で行ったことがある国で何かそういうのをやったほうがいいだろうというふうにお話をいただいて。それからイタリアで何か刺繍がないかと思ってすごい探して、それがアッシジ刺繍っていう刺繍だったんですけど。だから必死に探して見つけた刺繍を自分の研究テーマとして研究することになりました。イタリアの刺繍っていうふうの研究テーマを決めたのはいいんですけど、イタリアに行くお金がないということにその時に気が付いて、日本にフィールド先を変えて、日本の中で何か自分がワクワクするような刺繍の作品がないかなと思っ

て探した時に、日本の女性たちが作る教会刺繍っていう刺繍があるとまた偶然知って。全部偶然なんですけど、そこからもう一生懸命、修士論文をなんとか書き上げました。私のその修士論文の思い出は格闘したということですよ。

でも論文を作成していく中で、それまでの自分が書物の中だけで暮らしていたので、たくさんの人と関わりたいなと思っていました。そしてそれが叶ったのが京都文教大学でのいい思い出です。モノを通して、一つの情報を得るためにたくさんの人に話を聞いて、連絡して、また約束してみたいなことを繋いでいきました。自分が知りたいと思うことにたくさんの人が協力してくれるということが、感動した思い出になっています。

遠藤：

ありがとうございます。ちょうど30分。確かに学会があって、すごく院生に負担がかかったことは覚えています。当時、波平さんが会長だったんだと思いますが、すごく感動して、今までにこんなに院生が働く研究科はなかったっておっしゃっていただき、最後にすごい感謝の言葉を述べてくれました。確か、これで何かごちそうしてやって、といくらか渡されたと思います。ただ、今はもう大学や院生に負担がかからないように委員会方式で学会運営されるようになったので、それはそれでいいのですが、ちょっと寂しい気もしますけど。それでは次の30分ですが、院生時代の勉強と修了後の進路、どういうふうに進路に影響を与えたかっていうことをまた自分なりに述べてください。お願いします。

水口：

はい。再び水口です。僕は卒論は森正美先生だったんですけども、「観光と音楽」というテーマで書いたということもあって、大学院の修士では観光つながりで橋本和也

先生を紹介していただいて、橋本先生のもとで学ぶことになりました。

大学院に入って、自分はペルーの音楽、アンデス音楽について研究するとして、何がやりたいんだろうと、かなり紆余曲折してしまいました。なんとか現地に調査に行けるっていうことになって、まず3カ月行って、その次、8カ月行ったんですよね。僕はそんなに語学が得意なほうじゃなくて、スペイン語もほとんど片言しか喋れない状態で行きました。当時、東大の博士を中退して琉球大学の医学部に入ったばかりの知り合いがいたんですけど、その人がちょうどペルーに行くと言うので一緒に同行させていただけることになって、その人に現地での動き方から現場の調査法までいろいろ改めて叩き込んでいただきました。ペルーのフィールドワークではそれまで授業で習ってきたこととはやっぱり違って、ちょっと前まで内戦があったので、人がカバン置いてそこから離れたら爆弾かもしれないから逃げなきゃいけないよとか、そういういろんな情報を教えてもらったりとか。実際、僕がいる間にも国立銀行の爆破事件が首都であって、その前から「この週末はやばい」という噂が流れていたりとか、そういうのを実際に体験していく中で、自分のフィールドワークどうしようかなと。現地で実際にどうしよう何しようってかなり悩みました。

前回1カ月いたクスコに予備調査でもとりあえず入るんですけども、その日本人宿って日本人研究者が皆、行くんですね。そうすると、その宿で紹介された人から調査に入っていくと、皆、結局同じとか似たルートになってしまうのかなと思って、そうじゃないルート、日本人とか研究者と関わっていない人たちの中からもっと拾い上げられるものと出会っていきなりたいなっていう思いがあって。考えてみると、そういうルートが入り口でも先は違うんだし、そうすることでもっといろいろ出

来たともあとで考えれば思えるんですけどね。でも当時はそうは思えなくて。で、どうやって出会ったらいいのか分からないと思いつつ、いろいろ試行錯誤したりしている中で、現地の同年代の大学生たちと出会いました。

そういう人たちの中の1人が、うちの家、部屋空いているからホームステイできるからおいでよって言ってきて、じゃあ今度来る時に、そこに8カ月お世話になるっていうことになって、今度、その家を起点にフィールドワークしていくっていうことになったんですね。そうすることによって、ようやく自分のテーマが、ホストをしてくれる家族を起点にどう見ていくかっていうことになりました。それでようやく田舎から都市に出てきた第1世代と第2世代の感覚の違いみたいなことを、音楽の聴取がどう変化していくか、という視点から見えていくというかたちで修士論文の方向が決まっていきました。

やっぱり、どれだけこれでどうだって言っても、現地に行くのがららと崩れるし、その中で現地にいる時はいる時で、インタビューしても話を面白おかしくもられているってあとで判明してやりなしたりとかしながら、がんばるんですけど、結局何が重要な情報で論文として形になるためには何を情報として押さえないといけないのか、みたいなものがなかなか見えなくてこっちに行ったり、あっちに行ったりして。それにラテンアメリカってやっぱり距離がものすごくあるので、行くだけでもお金も時間もかかるし、追加調査も自信のないままとにかく五里霧中って感じでやりながら、これで最後までいけるっていう道が見えるまでは、かなり先生にもやきもきさせてしまひながら、なんとか完成までこぎつけました。

あと、僕はかなり欲張りで、あれもこれも分かったことは全部書きたいって論文としては致命的な自己顕示欲みたいなと

ころがあって。本当はスリムに削ぎ落としていかなきゃいけない論文にあれもこれも盛り込みすぎるっていうのが卒論だけでは学べずに、修論も結局そういうかたちで出してしまったっていうのは自分自身の修論での後悔というか、悔いの残るところですね。

修士卒業後、僕は卒業と同時に、当時、ペルーで知り合った人と結婚しました。あ、日本人ですけれども。修士論文を出して修了式で突然発表してその1週間後ぐらいには関東に引っ越して、向こうでの生活をはじめている感じでした。彼女が僕が引っ越した直後ぐらいから博士課程に進み始めたので、僕は派遣とかで働きながら、自分の研究をほそぼそと進めたりとかしながら、今後どうやって生きていこうって考えていたんですけど、彼女が博論書き終わったぐらいに、じゃあ僕もやっぱり研究に戻りたいなということで、東大の博士に入りました。で、今もまだ籍は残っていて、博論はまだ書けていない。要するにそういうことなんですけれども。

それで今は博士課程に籍を残しながら、非常勤講師をあちこちですべて、それで時間が忙殺されてますます研究時間が取れないという悪循環の中を生きているという、そういう迷宮の中を彷徨っている状況であります。

小林：

修士論文のテーマですが、大学院では、昨年度に退職されましたけども、橋本先生にお世話になっていました。修士論文なんですけども、近代スポーツであるサッカーがどういうふうに関心を持ってきたのかをテーマに研究しました。このテーマを設定する上では、先ほど言った、自分の持っていた疑問が基礎にありました。研究するうえで、フィールドをどこに設定しようかということもありました。橋本先生と話したのは、やっぱり海外を見るべきだという

ことで、当時、フィールドをスペインにするという話をしていたんですけど、結果的に時間的な問題とかを考えるとちょっと難しいなと。じゃあまずは国内でフィールドワークをしてみようという話になりました。先ほど話しましたが、大学院に入る前に1年、間が空いたっていうのは、要は研究生を1年間やっていたんです。研究生の時の話をさせてもらいますと、橋本先生とのやり取りをする中で、いつまでにこの資料を出してみろということを言われて、たびたび出したんですが、「これは何だ」という指摘を一番多く受けました。その中で、右往左往している間に、橋本先生からは、お前が今持っている関心は何かと問われました。その時に言ったのは、プロサッカーができて、その後にチームを応援し、支援するサポーターが増えてきて、サポーターがどう考えているのかとか、地域とスポーツがどういうふうに関係しているのかっていうことにちょっと関心があると。じゃあお前はまずプロサッカーの観客席行って、サポーターの活動をみたり、サポーターの声を聞いてきたらどうだということで、まずは行ってみようという話になりました。見聞していく中で、いろいろな人がいろんなことを考えていると。細かなことはあんまり覚えていないのですが。その中で、今は自治体がもうないんですけど、当時の静岡県清水市のプロサッカーチームのサポーターが非常に面白い取り組みをしていました。実際に試合に来るためにバスツアーを組んで、清水市からサポーターを連れてくるとか。

実際にサポーターが一つの団体となっているわけじゃなくて、いくつものサポーターがあって、大連合を組んで応援をしているとかありました。さらに、さっきのツアーなんかもうそんなんですが、子どもたちを引っ張ってくることで親も観客席に連れてくる。観客動員を増やす取り組みもしており、チームをただ応援するだけじゃなく

て、サッカーを通じて、まちを盛り上げていこうという取り組みになっていることがみえてきて、これは非常に面白いと思いました。修士論文ではフィールドを清水市にしました。清水市は、知っている人は知っていると思うんですけども、サッカーが盛んで、非常に有名なまちです。小学校、高校と非常に強いチームがあって、全国的にも有名になった地方都市です。その中で、よく言われていたのが、日本にブラジルがあると、それが清水市だという言い方をよくされてきました。それがどういうふうにつくられていったのかということ进行调查し、研究しました。その中で、例えば日本でローカリゼーションしているスポーツとしては、ローカリゼーションというか「土着化」という言葉のほうがいいんですけども、野球があり、野球の特徴と比較しながら、清水市のサッカーが今進んでいる方向をみることで、日本のサッカーの定着が違うかたちで進んできているんじゃないかとか特徴をみていこうとしました。修士論文をまとめたんですけども、その後、僕自身は、進路に非常に悩んでしまったところがありまして、このまま大学院の博士課程に行くか、それとも就職するかということだったんです。ここでもちょっと期間をおいてしまったんですが。ある時、もう一つ視点を変えて清水市をみてみますと、実はサッカー自体がまちづくりの一環になっていることがみえてきたんですね。実際に清水市ではサッカーをしていて盛んというだけでなく、少年サッカー大会とか地元開催の大会を開いて、それで人を呼んだりだとかしています。そういうのをみていくと、実はスポーツが、まちづくりにつながっていることがわかってきました。

そういう観点から自分としても地域づくりとか、まちづくりとか、そういう分野に進んでみたいなということを思いました。現在は、就職をしたのですが、まちづくりコンサルタントとして、行政が策定してい

る計画書とかがいろいろとあるのですが、その政策立案に関わっています。行政の政策の助言をしたりとか、そのための調査研究を支援している会社に勤めています。そういう分野で文化人類学、このフィールドワークを通じて学んできたことが一つ、自分の進路にも生きています。それからもう一点、4年くらい前からなのですが、研究テーマは変わりましたが、博士課程に進んでおります。以上です。

#### 水井：

先ほどの話でも少しフィールドの話はしたんですけど、修士論文は「ゲストハウス」という、今ではすごくメジャーな業態の宿泊施設ですけど、そこに僕自身が沖縄で初めて泊まったということもあって、それを「フィールド」にて研究をしました。主に沖縄本島内だけでしたが、「ゲストハウス」にはどういう人たちがいて、どういう活動が行われているのかといったことをまとめたものを修士論文にしました。そもそも、私がゲストハウスに泊まった理由というのは「1泊1500円で泊まれる」という、ただ単に「安いから」という理由しかないんですけど、そこに泊まっている人たちを見ると、もちろん観光で来ている人もいますし、あと、スキューバダイビングのライセンスは1週間ぐらいスクールに通わないといけならしいですね。ちょっと僕、詳しく知らないんですけど。それでお金がかかるので1500円で泊まれる宿に泊まっているという人たちもいれば、沖縄には何回もリピーターで来ていて、もう沖縄が大好きで、沖縄に「移住」したいと。沖縄に住みたいから、生活のために「仕事」を探す。そして、家も探さなければならぬ。それでゲストハウスみたいな安い宿に泊まっていると、いろんな人が居て、いろんな情報が入ってくる。そういった旅行者同士の交流があって、情報もたくさん入ってくるし、「そういったメリットもあるから、泊まっ

ているんです」というような人がたくさんいて、本当にさまざまな理由で人がゲストハウスに集まっていました。実は、「沖縄」をフィールドにしていたにも関わらず、あんまり昔から沖縄に住んでいるいわゆる「地元の人」、「沖縄出身の人」の知り合いってあまりいないんですよ。というのも、ゲストハウスを経営している人自身がバックパッカーで、タイとか世界を放浪した揚げ句、沖縄でもこのゲストハウスができるんじゃないかということで始めた人が多かったです。要するに「ナイチャー（内地人）」ですね。県外から来た人がほとんどでした。ゲストハウスに泊まる人の目的はさきほど話しましたが、そういった事情の方がほとんどですので、やはりほぼ「ナイチャー」です。そういった中で、「沖縄がフィールドでした」と言っても、今、思い返してみれば、あんまり「ウチナンチュ（沖縄人）」の知り合いもないよなっていうのがちょっと不思議な感じです。僕は、大学院を2005年3月に修了したんですけど、今2018年、14年経って振り返ってみると、ゲストハウスとか、あと、移住、本土のほうでも田舎に移住するっていうのが今、流行っていますよね。そういうのを実は最先端で沖縄ではあの当時行われていたんじゃないかというふうに最近ちょっとニュースなんかを見ていて思っています。

先ほど、今、大学のほうで地域連携の仕事をしていると言いましたが、COC+という文科省の補助金事業に携わっていることもあって。今年の8月に京丹後市へ仕事で行く機会がありました。そこでもやっぱり積極的にIターン、Uターンを受け入れて、「地方の人口流出を抑えたい」とか、「若者に地元の企業に働いてほしい」というような、そういう行政の方の声とか、経営者の方の声とかを聞くんですけど、そこでも「じゃあ、移住のためにどういうことをしていますか？」って聞くと、行政の支援はまだまだだし、ほとんど「何ができてい

か？」って言ったら「何もできてません」というような話の中で、実はこれ、自分が14年前に大学院で学んだことってというのは、少なからず活かせるんじゃないかなというように。まだ異動して半年しか経っていないのであんまり大きなことは言えないんですけど、そういうことを今後は活かしていけるのかなと。あの時学んだことが今の部署に配属になって、活かすことができるのかなとちょっと考え始めているところです。

#### 佐藤：

在学中の研究のことを振り返ってみますと、当時、私たちは、とにかくフィールドに行ってきたさいという教育を受けていました。それで私は中国、特に旧満洲のあった中国東北地方をフィールドとして調査を開始したのですが、まだテーマが漠然としていました。とにかく行ってこようと思い、2004年に初めてフィールド調査に出かけました。その当時、ちょうど日中関係が非常に悪い時期で、小泉政権下の靖国問題や教科書問題が話題になっており、中国側では反日デモが連日報道されていました。そんな時期に私は中国にフィールド調査に出かけたため、例えば友人や親とかは、「今中国に行って大丈夫なの？」というようなことをよく言われました。ところが、この研究科の先生とか仲間たちは一言もそんなことは言わず、「気をつけて行ってこいよ」と送り出してくれました。

やっぱり文化人類学的な価値観というか、社会一般の感覚とはずれているのかなと感じることはありますが、結果的には行ってよかったです。行ってみることで、新聞やテレビの報道と実際の中国の状況が全然違うということがわかりました。特に、日本のワイドショーとかで日常的に映像が流されていた反日デモのような状況は、中国の日常生活にはなくてごく一部の出来事にすぎなかったのですが、それがあ

たかも中国全土で広まっているように報道され、それを簡単に受け入れてしまう状況が怖いなと思いました。やっぱり現場に行かなきゃ分からないことはたくさんあって、現場に立って考えることの大切さはその時にすごく実感しました。ですので、先ほどの松田先生の話でもありましたけれども、フィールドワークにおける人との出会いってものを僕にとっても非常に強く共感するところです。中でも僕の研究内容を決定付けていく出会いが、今、90歳ぐらいの方なんですけれども、戦前、朝鮮半島で生まれて、そのあと創氏改名を受けて、中国の大連という場所に「日本人」として家族で移住して、戦後は中国籍を取って、今は中国人として暮らしている方がいます。人生のうちで国籍が二つも三つも変わるという経験をされていて、戦争や植民地の歴史や記憶というものを、一人の人生を通して考えるようになった大きな出会いでした。

そういった人との出会いの中で、僕が学校で学んできた歴史とは違うなということが見えてきたのがとても面白かったです。それが僕の研究テーマに発展していきました。

#### 保科：

大学院ですけども、最初のM1のころは本当に研究テーマってまったく決まっていなくて。何をしていたかって、先ほどちらっとお話ししましたが、ほとんど学生プロジェクトに関わる事が多くて、大学、M1の時は鶴飼先生にいろいろ教えてもらいながら、実践的なことを森正美先生から教わるみたいな、そんなことをずっとしていました。最初、この京都の宇治のほうで、もしかしたらご存じの方もおられるかもしれないですけど、宇治チャレンジャーってプロジェクトに関わっていて、ずっと宇治茶の啓発活動とかをやっていました。それからあと、全国各地でこういう大学と地域との連携というのはどんどん広がって

いる時期で、そういうプロジェクトがあったので、そちらのほうのサミットとかに参加して交流したりとか、今で言うマルシェなんかを宇治でやったりとか、そんなふうな活動の代表とかをやっていました。ただ、やっぱり地域に出るのがすごく好きだったので、例えば、先ほど、松田先生のお話の中に郡上八幡の話があったかなと思うんですけども、僕らも研修っていうかたちで行かせていただいて、郡上おどりについていろんなインタビューをさせていただいて、まとめさせてもらって、郡上おどりにすごくはまってしまいました。それから徹夜おどりも何回か行かせていただいたりとか。あと、京都の市役所前で毎年、郡上おどりのイベントがあるんで、そんなのにも参加させていただいて、気が付けば、別に岐阜出身ではないんですけど岐阜県人会に入っているというような、毎年手紙が来るってというような。ここ数年、ちょっと参加できていないんですけど、そんなふうにして、ある意味、フィールドワークは故郷を作るっていうお話されていましたけど、まさしくそうだなと思って。今、FacebookとかSNSでつながれる時代なので、いまだに、郡上八幡の方とはそれを通じていろいろ情報交換させてもらったりとかしています。なんとかフィールドワーク先とか研究テーマを決めなきゃいけないということで、M1の終わりの2月の終わりに鶴飼先生から、先ほどお話しした高取町を紹介させていただいて、そちらに行つて。ちょうどその行った時、3月が高取町の大きなイベントがありまして、3月の1日から31日まで雛めぐりっていう。城下町があるんですけど、お城まで続く一本道。

今で言う商店街みたいなどころなんですけど、そこの古民家とかにお雛様飾って、観光客を呼ぶっていうようなイベントをされて、その準備をされていたんですね。その本当、団塊の世代の方々が定年退職されて町に戻られて、この町をなんとかしたい

ということで始められたイベントで、手作りでいろんなものを作っておられて。その雰囲気とか、やってはることが自分たちがその学生プロジェクトでやっていることとすごく似ているなと思って共感をして、それから、実家が滋賀県なんですけど2時間かけてずっと通って、そこで何かテーマを探ろうとしてやっていました。私自身はいろんな本屋さんとかに行くと、まちづくりの始め方みたいなものがたくさんあって、まずはそれを少し探ってみようというのと。でも一方でやっていると、まちづくりってどうやって終わるんだろうかという疑問もあって。高取町でも10年間いろんな取り組みやってきたけども、それが終わって、間10年空いて、また10年始まるみたいなことがあって、サンドイッチみたいなものがあるなと思って、そういうのをいろいろ、いろんな方にインタビューしながらやっていました。高取町ですと活動して、いろんなフィールドワークしていく中で、自分の中で第三者的にいろんな町の課題とか、魅力とかを知っていく中で、少しずつ修士論文を書くにつれて、自分がやっぱりどこか当事者みたいな気持ちになってきて。自分も研究者っていうのには向いていないし、どちらかと言うと実践で活動するほうがそれこそ役に立つのかなと思ったりもして。特に町の人たちが求めているわけではないんですけど。ちょうど大学院を出たあと1年間はほかの会社で就職をして、そこで今で言う六次産業化とかって。栽培から加工から販売まで一括してやるとか、あとは地域資源を使って商品を作るとかっていうベンチャー企業で働いていたんです。でも、どうしてもずっと高取のことが忘れられなくて。とにかく近くにいたいと思って奈良に行っていたので、何かできないかなと思った時に、たまたま今いる会社のほうから人を探しているということで、思い切って高取に移ろうと思って、転職をしました。



新卒で入って1年で辞めるっていう、社長にはだいぶ迷惑をかけたんですけど、自分の中では高取に戻れて良かったのかなって思いますし、実際に町の人たち、帰ってきたことをすごく喜んでいただけているのかなと思います。まちづくりとかでやっているとか、いろんな利害関係がいろいろあったりとか、行政は行政の、民間は民間の、町民は町民のっていう中で、たぶんフィールドワークとかをしていると、結構その辺の調整力みたいなのが自然と身に付くというか、キーパーソンの見極め方とか、そういうのが体で覚えられるというか。だから、よそ者でも入りやすいっていう、その辺の技術的のところって、文化人類学を大学院で学びながら、それが今に活かされているのかなって思ったりはしています。以上です。

#### 笠井：

私の修士論文のテーマは、日本の聖公会というキリスト教の教会の中で作られている教会刺繍というものをテーマにしたんですけど、そのテーマにたどり着くまでに、ただ単に自分がそういう刺繍が好きというだけで始めようとしていたので、すごくそのことで苦しんで。いったいどういうふうにそのテーマをまとめるのかっていうのが大変だったんですけど。結局、何度も杉本先生とお話しして、先生と話すことによって自分の考えをまとめたりですとか。あと、自分が思っていることを外に出した時に初めて気付かせてもらえたりとかして。修士論文を書き上げていく中で分かったのが、私はやっぱり物自体にすごく興味があって、その物を作る人ですとか、作られる過程みたいなのにすごく興味があって。それを自分の中で一度整理して人に伝えたいんだっていうのがすごく分かりました。その教会刺繍というのは、信仰上の理由で絶対にあくまで手で全部やり切るんだっていうふうに信徒の女性たちが決まりを作っ

制作しているものなんですけど、私はそれが手で作られているっていうことにすごく興味があって。なんで手にこだわるんだろうっていうこととずっと向き合っていて。それを結論にまとめ上げるのが本当にもうしんどくって。もうなんでもいいんじゃないかとか最後は思っていたんですけど。結局、女性たちが手にこだわるっていうのが、何かこう、今、大量生産、大量消費の中にある真逆に自分たちを置いて、何か自分の信仰を外に出すみたいなのを、そういうことをしたかったのかなと思って。すごく書いていて楽しかったので、もう少し勉強してみたいなと思って博士課程に進むことにしたんですけど、それが、大阪の吹田にある国立民族学博物館の中の総合研究大学院大学っていう大学なんですけど、実はそこに行ったんですけど、9月の末で博士論文を書かずに退学をすることにしまして。それは、その理由っていうのが、やっぱり初めて博士論文に向き合った時に、イタリアにいよいよ行くことになったんですけど、イタリアに行って初めて現地の人と直に話すことで、刺繍自体を論文にまとめるというよりは、その刺繍をどういうふうに継続していくかですとか、今、本当に人手も足りないし、お金もないっていうことで、どういうふうにそのお金を集めて、その文化を存続するにはどうしたらいいのかということに自分の関心が移っていった。

博士論文自体は書けなくて、それは自分の不徳のいたすところではあるんですけど、フィールドに出て、自分とはまったくバックグラウンドが違う人たちとお話をして、それでも何かつながるものが異国の地であって、それがすごく嬉しくて。それが何かすごく論文を書いていく過程で見つけられたっていうのが、私にはすごく大きな贈り物だったなと思って。今は充電期間中なんですけども、そういう手仕事をたくさんの人に伝えて、また、消えそうな仕事があったら、それを存続させる方向を皆さん

で考えていくような仕事ができればな  
いうふうには今は思っています。

遠藤：

どうもありがとうございました。また  
ぴったり30分で終わりという。すごいな。  
文化人類学者は大体時間があんまり守れ  
ない人が多いんですが。フロアのほうも  
卒業生、修了生の方が結構いらっしや  
るんで、最後に10分ぐらい何かフロア  
のほうから発言してもらおうかなと思  
います。人文社会学系に対して風当た  
りがきつくなっているなというのは確  
かに感じます。それについて、「役に  
立つ」というのはどういうことなのか。  
こういう指標でやっていると大学は  
痩せ細っちゃうかなという懸念がある  
のですが、それについて皆さんどう  
いうふうに考えるか、ということを通  
話していただきたいと思います。

水口：

これは今、日本が直面している非常  
に複合的な問題で、大学はまさにその  
象徴的な現場の一つであると思いま  
す。学問というものであったりとか、  
「知」っていう、人類がこれまでに  
積み上げてきたものに対する敬意とい  
うものが今、がらがらと崩れてきて  
いる。そしてその過程で獲得してき  
た人権であったりとか、「より良く生  
きる」とか、それからユートピアとし  
て描かれる「貧困や争いのない世界」  
とかっていう、そういうものを目指  
して西洋近代社会というのは進んで  
来ていたはずで、日本も、今「第三  
世界」と呼ばれている国も、そうい  
う近代思想に包摂されることで「よ  
り良い世界を生きる」はずだってい  
う、そういう大きな物語が破綻して  
しまった状態になってしまっている。

そしてその中で、逆に、もう非常  
に暴力的な新自由主義経済の「お金  
さえあればなんでも許される」とい  
う、ある意味、中世的価値観の世界  
にまで振り子のようにふ

れている状態に今、世界中が巻き込  
まれてしまっている。まさに日本て  
いう国はその最先端を走っている国  
の一つだと思います。大学がその中  
でこんなふうになってしまっている  
というのは、一つは、日本の経済問  
題、格差と再分配に大きな問題があ  
る。それって現代日本の抱える閉塞  
感を生み出している大元で、国が何  
を優先しているかっていうことがも  
たらす一つの帰結、現れだとも思  
うんですね。だからそういう意味で、  
目先のお金であったり自分たちの利  
益っていうのを、権力に近い人や大  
手企業の経営陣、「力」を持っている  
人たちが他のことそっちのけで目  
指している結果、いろいろなものが  
本来緩やかに、おおらかにあった  
ものを締め付けることで、「成果を  
出せ、成果が出ないのは間違ってい  
たからではなくって、それはお前た  
ちの努力が足りないんだ」とい  
う「責任転嫁」が起こってくる。そ  
の背景には、ある種の国家無謬主  
義、「国は権威を守るために決して  
間違いを認めてはいけない」みたい  
なものが半ば信仰に近い形で蔓延  
していたりすることも非常に大き  
いと思います。その無謬主義ゆえ  
に、首相が言ったことがどんなに  
嘘っぱちであっても、そのために  
公文書改ざんしなきゃいけない  
みたいなことがまかり通ってしまう  
。そしてそれに対する異議申し  
立てをすることすらできない。

私も今、大学で非常勤で教えて  
いたりとかすると、学生と話をし  
ていても、例えば自分自身のコメ  
ントを出すっていうことについて、  
私に対してだけ書くっていうのは  
まだまだマシなんですけれども、  
それを読み上げるとか、人前で  
あなた自身の声で言いなさいとい  
うと、途端に萎縮して話せなくな  
るんですね。人前で自分の意見を  
言うということに極度に恐れている  
のを、もうひしひしと感じていて

その背景には、人からどう思われ  
るか分からないということに  
対する恐怖というものすごく  
感じる。そんな中で考えていか

なきやいけないのは、「社会が閉塞に向かっていく中で大学はそういうものと戦っていかねばいけない。そしてそれとどう戦っていくかっていう時に、大学は誰の側に立つのか」っていうことを明らかにしなければいけないと思います。今大学で軍事研究の増加が徐々に問題になっていますが、そういうことに対する危機意識の欠如って、歴史教育の敗北ですよ。日本人の教養を巡る戦いに大学教育というものが敗れてしまったということじゃないですか。ブラジルの教育学者のパウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』を読みますとね、彼の書いていることって、今読んでもまさに当てはまることってすごくいっぱいあるんですよ。なぜ貧しい人はトランプに投票するのか、そして彼らはそこには何を求めているのか。自分自身のコンプレックスを乗り越えられないって分かった時に、どうしてそういう行動を取ってしまうのかということ私たち、大学人はもっとちゃんと向かい合ってこなきやいけなかったんだなっていうことをいつも考えています。

あと、若い人たちともっと大学自体がいろんなことについて話をしていかなきやいけない。そもそも学生は今の日本のおかれている危機的状況っていうのをまったく理解していない。日本の政権がどれぐらいもうひどいことになっていて、政治や司法がどれだけ破綻しているかとか、経済がどれだけ今、斜陽に向かっているかとか、そういうことについてもまったく知らない。しかもメディアが海外向けと日本人向けで同じ物事について違うことを発信しているかっていうことも知らない。日本の大手メディアがすでに大本営発表になってしまっていて、そこにはお金と権力が絡んでいて、戦前の過ちをそのままなぞってしまっているっていうことに対しては分かっていない。日本という国が日本語という言語によって島国的な閉鎖環境になっていて、その中でいかに異常な世界を生きさせられているの

かっていうことについて、学生は知らない。

文化人類学だからというわけだけでなく、我々は知識人の一翼を担う存在として、そういうものに対してきちんと対峙していく義務がある。サイドも『知識人とは何か』の中で述べていますけれども、やっぱり責任があると思うんですよ。だからそういう意味で、僕は大学とは、知識人の末端を生きるものとして教養を持ち、批判精神とアマチュアニズムを持ち、自らのポジションを意識して生きることができるとして学んでいける環境である必要があると思っています。

僕は専門がラテンアメリカなので、ラテンアメリカの貧困、社会問題と社会運動について学びながら、じゃあ日本はどうだろうって常に見ながら考えていくっていうことを自分の授業の中でやっています。その上で学生には、それに気づいたら、その気づきをそこで終わらせてしまわずに、それをタブーにせずオープンに喋るっていうことを、言い換えれば、生きるということ自体が政治的なことから逃げられないのだから、友達と政治をタブー化せずに気軽に、日常的に喋っていくっていう実践の中から社会を変えていくための第一歩としてやってみてはと今、試しにやっています。本当に若い世代が変わっていくことと、大学がそれを手を取り合っていくことで、この国を変えていく思想的現場を担っていく必要があるのではと思います。そして、国はそれがどこかでわかっているから、大学の教育について、大きく圧力をかけている。その最たるものとしては経団連とかね、そういう既成の権力は互いに癒着しながら徹底的に自らの利益を脅かす思想や多様な人のあり様というものをゴリゴリとすり潰していこうとしている。学問であつたり批判精神というものであつたり、物事ときっちり向き合って深めていこうという、そういうもの。それから民主主義とか人権とか自

由っていうものの意味とかね。そういうものについて、学ぶというか、そもそも気付くきっかけをまず与えることが本当にまず何より急務だになっていうことを考えることが多いです。本当は授業の中で、もっと楽しいことをいろいろ学生に学んでほしいなと思いつつ、僕はどうしても授業は社会の辛い部分と向き合う時間が多くなってしまっています。ラテンアメリカの授業をやっているけど、これじゃラテンアメリカ好きになって「行きたい」って言ってもらえないなとなってしまっているところを今どう乗り越えるかっていうのが自分の中の課題でもあります。でも、やっぱり将来、自分たちが担う国について、ちゃんと考えて議論できる社会にしていくっていうのは、大学はそれができる最後の砦だと思うので、そこときちんと向かい合っていくということは、本当に教員一人一人、もしくは教員だけでなく、大学という高等教育を受けて、そこから社会に出ていった、もしくは大学院から社会に出ていった人、一人一人の責任だとも思うっていうのが僕自身の考えです。

小林：

水口君はいろいろと考えているようですが、僕は、「役に立つ」という観点から話をしたいと思います。厳密な話をしますと、今の仕事をしていく中で、文化人類学は、理論であるとかは、関わりが薄くなっています。むしろ僕がやっている仕事の中で言えば、経済学とか、法律とかの分野のほうが重要になっています。ただ、そうであったとしても、僕自身は入社した時からずっと思っていることなのですが、自分がこの大学で6年間、7年間やってきたこと、文化人類学はやっぱり自分にとって非常に重要な資本になるので、活かしていきたいとずっと考えております。その中で、自分として他の人と観点が違うと思うのは、やっぱりものの見方だと思います。例えば、

僕自身の今の博士課程での研究にも関わってくるのですが、行政が市民に対して政策を講じるという時に、じゃあこの「市民」っていったい誰なんだろうかということがあります。「市民」というのは、大多数としての市民になりますが、その反面、マイノリティもいます。どこまでをマイノリティにするかということもありますが、その中にエスニックマイノリティがいたりとか、障害者も入ってきたりとか、今ではLGBTとか言われますけども、そういった人たちもいます。こういう人たちにも目を向けて、政策を考えていくという視点があります。その他、やっぱりフィールドワークの観点ですね。僕自身が大事にしていますけども、そのまちが何を大事にしているのか、このまちにとって何が大事なのかを提案していく上で、きちんと押さえるようにしています。やっぱりその地域に寄り添って、地域にとってどういうところが大事にされていたりするのとか、地域にどういう課題があるのかっていうことを押さえるようにする自分の立ち位置です。

僕は、入社して15年ぐらい経っており、年数が若い社員が増えています、彼らを見ていく中で、その成長の遅さとか、やっぱり何かを考えたりまとめていく力がないなというのを、年々、非常に感じています。これをどういうふうに捉えるかっていう問題もあるんですが、今のところで考えていくと、やっぱり本を読んで疑問に思ったことに対してどういう考え方を自分で持つとか、考え方をまとめていくっていう、考える力ですね。この点の不足ではないかと思います。やっぱり学問の中で身につけてきたことでもありますので、こういう考える力をどう養っていくかということは、教育の中で、今後も重要なことなんじゃないかなと考えています。

水井：

自分の立場は「大学職員」という立場で

すので、あんまり「大学はこうあるべきだ！」っていうのをちょっと語りにくいところもあるんですけど。今の地域連携の部署に異動になって、地域の方といろいろ話す機会が多くなって、その中で、地域の方に学生のインターンシップの受け入れを経営者の方などをお願いするという機会が多くあります。その中で、社長さん、主に中小企業の社長さんですが、話を聞いていると、地元への愛着がすごくあって、大手企業とかの下請けをやっているようなところだけど、自分たちの仕事に対してすごく誇りを持っていると感じます。新卒採用もほとんどしたくないけど、中小企業だから全然名が通っていないし、応募もしてもらえない状況らしいです。そんな中でもやっぱり自分たちは今後、この社会で生き残っていかなければいけないし、自分の会社も、もちろん社員たちもいるから続けていかないといけないというような話をよく聞きます。なので、そういった地域の人と話す中で感じたのは、社会に対して、今さっき水口さんが、もっと議論をするべきだと。それはやっぱり学生だけじゃなくてもいいのかなというふうに思います。地域の人、むしろ学生、同世代とか先生と議論をするだけではなくて、やはり地域の人、いろんな世代、いろんな職種、いろんなことをしている人たちと一緒に、政治のことでいいですし、地域のことでいいですし、そういったことをする機会が増えたほうが今後の社会を考える上ではいいのかなと思います。というのも、やはり核家族化が進んで、あんまり今の学生というのは年配の方と話す機会というのもなくなっていますし、「本も読む」ということもしなくなっています。いや、「しなくなっている」わけじゃないですね、「読まない」です。はっきり言って「読まない」ので。そういった中で、じゃあ自分たちが「教育の現場」で、どういったプログラムを提供できるかと思ったら、そういった交流の場、議論の場というのを、

座学だけではなくて、そういった仕組みの中で展開していくことが必要なんじゃないかと思います。なおかつ、松田先生の講演の中にもありましたけど、私もエチオピアと一緒に教務補佐として同行しましたので、ショック療法的な、学生がフィールドに行って、ショックを受けて「気付く」というようなこともありますので。インターンシップもまさにフィールドワークに似ているところがあると思っています。インターンシップの授業って、最初は学生がみんな萎縮しているんですね。

「インターンシップへ行く学生」って実はアルバイトもしたことないような学生が多いです。でも、このままではいけないと気づいて、自分はゆくゆくこの大学を出て就職しなきゃいけないという中で、アルバイトもしたことないし、たぶん就職活動もこのままではうまくいかないかもしれない、取りあえず大学公認の「インターンシップへ行っておこう」ということで「インターンシップへ行く」という学生が多いんです。今年はインターンシップへ行く前にガチガチに萎縮した学生が多かったんで、「コミュニケーションスキルアップ講座」というのをやりました。これは、地域の社長さんなどに協力していただいて、学生と一緒に短大の調理室を使わせてもらって、「料理」をしました。そうするとですね、社長さんたちも「協力させてもらいます」って言ってくれるんですけど、「でも僕は全然料理できないからね」ということを言うような社長さんとかもいたりとか、一方で女社長さんとかも来て、この女社長さんは、「はい、あなた、これ切りなさい」とか、「これ、買い物行ってきなさい」とか、そういうふうに行っているんです。隣にいるその何もできない社長さんとかが学生と一緒に買い物行ったりして。そういう中で学生も、「あ、「社長」だけど、「社長」ってそんなに固い人ばかりじゃないんだ」と。やっぱり一人間であるし、自分のお父さん、お

母さん、もしくはおじいさんの世代かもしれないけど、なんら変わりのない「普通の人なんだ」ということをこのプログラムから感じてもらって、インターンシップに行ってもらおう。その社長さんからしても、「自分の孫とあんまり変わらない」とか、「孫とか息子もこんなだった」というようなことをイメージしてもらって、そこでインターンシップを受け入れてもらって、学生を育てていくというようなプログラムを今年はやしてみたんですけど。そういった機会を通じて、学生に何かを感じてもらって、もっと学びたいという学生は、こちらがさまざまなプログラムを、座学でもいいですし、実践的なものでもいいですし、提供していくっていうのも今後のかたちとしてはいいのかなと、ちょっと考えています。

#### 佐藤：

私は、そうですね、文化人類学のもっとも重要なテーゼでもある、他者理解という問題は今の時代こそ、これからの時代こそ必要だろうと考えています。やはり外国人労働者であったりとか、移民という人たちがどのように捉えていって、どのように日本社会の中で共生していくかっていう問題が、まさに大きな喫緊の課題としてあります。すでに日本には250万人ぐらいの外国人が暮らしているわけですし、そういった人たちの補償問題であったりとか、権利の問題も考えていく必要があります。最近、徳島のとある介護施設を調査したことがあるんですけども、そこではフィリピンやインドネシアなど東南アジアから来たヘルパーさんが250人くらい働いていました。よく、日本語がうまく使えるのだろうか、日本でうまく介護職が務まるのだろうかといった懸念の声も聞くわけですが、その日本人の入居者さんにとっても受けがいいということでした。その理由の一つとして、東南アジアの人たちのハグの文化があるということでした。東南アジアでは、抱

きしめたりとか、ボディタッチが一般的で、肌と肌が触れ合ってぬくもりを感じるというところが、入所者の人たちにとっても親しみに繋がっているようでした。

こうした肌と肌のふれあいというのは、日本人にとってはあまり馴染みのない文化ですね。一見、相容れないかと思いきや、どうやらこの介護施設ではプラスに働いたようです。多くの外国人が日本で働くようになるとうなるんだろうという不安はあると思います。特に介護のような世界に、日本語も分からない全く異なる文化圏の人々がやって来ることに抵抗するような声も聞きます。ただ、異なる文化だからこそそのメリットというか、日本人だとなかなか抵抗があるような肌と肌のふれあいのようなことでも、意外とそういうところは簡単に乗り越えるものなんだっていうのは意外でした。とはいえ、このようにうまくいく背景には、施設内での文化学習もあって、フィリピンやインドネシアのこと、食文化や宗教などを少しずつ学んでいったそうです。やはり、こうした文化を学ぶ姿勢というか取り組みがあってこそ、うまくいくのかもしれない。これは介護施設内部の話ですが、こうした取り組みが社会のいろいろな場所で行われるといいなと思いますし、他者との向き合い方を探求してきた文化人類学の知恵が役立つところだろうと思います。

#### 保科：

役立つっていうところで言うと、今、そうですね、私が思いつくところとして、大学院で勉強して、文化人類学っていうものと接する機会があった中で、今、仕事をしていて役立つなとか思うのは、まずその巻き込む力とか、先ほどお話した調整力っていうところってすごく今は役立っているのかなと思っていて。今、仕事のほうでは農業をやらせていただいています、お米とかネギとかレタスとかを作っているんです

けど、特に薬草の栽培を今やっているんです。町自体はもともと薬の町っていうことで、古くは本当、推古天皇が薬狩りをして、明治頃には製薬売薬が盛んな地域だったということ。今、薬の町、高取というところをブランド化していこうということと行政と一緒に動いていて。そうなるってくると、いろんな方を巻き込んでやっていかないとイケなくて。先ほどお話ししたみたいな利害関係が、それを調整しなきゃいけないと。そういう中で、そのフィールドワークでいろんな地域に行かせてもらったりもして、そこで自分の研究したいこととかを、要はインタビューすることも巻き込むことになるので、いかに理解してもらって、賛同してもらってというところは、今の仕事にはすごく役に立っているかなというふうには思っています。あと、佐藤さんが他者理解っていう話をお話しされました、外国人のお話もありましたけど、僕らのところは農業と福祉の連携もやっていて。農福連携って言うんですけど、いろんな障害をお持ちの方がおられるんですね。発達障害とか知的障害とか精神障害の方がおられて、彼らのその考えていることとか行動とかって僕からしたら本当に文化で、全然分からないことがたくさんあって。でもやっぱり相手の立場に立って物事を考えるっていう意味では、文化人類学がこれまでやってきたこととたぶん同じなのかなというの思っています。その辺りがすごく役に立っているのかなというふうに思っています。あと、これは僕がもともと臨床心理学部からスタートしているというのがあって、最近では農業もストレスとか心とか体に健康にいいって言われているんですけど、じゃあそれと本当にどうなのかっていうことで、今、医大さんとか、ほかの大学さんと農村観光医療ツーリズムというものをやらせていただいています。

いわゆるカウンセリングと農業体験とを合わせたような、参加者へのフィールド

ワークをしてもらうようなことをしていただいたりして、心理学と文化人類学とを組み合わせながら今、いろいろ実践とかをさせていただいてやっています。そういうふうには、「役に立つ」って思えるのって実際にやってみて、行動してみたら、あと付けみたいなのところのほうが多くて、役に立つからやっているというよりは、こういうことを学んできて、やってみたらこれが役に立ったよねっていうパターンが多いかなというふうに思います。あと、人文学の、最近いろんな社会情勢のほうとか僕はあまり難しい話がよく分からないですけど、ただ、今回、研究科も閉まっちゃうということで、すごくそれは寂しいなと思う一方で、その文化人類学って意外といろんなところで耳にすることが増えて、それこそ書籍でもそうだし、漫画とかテレビとかでも文化人類学者が登場したりとか、そういうパターンとか、分かりやすいものも最近出てきたなと思った中で、こんな研究科が閉まるって話だったんですけど。文化人類学ってやっぱり分かりづらくて、何を学べるところで、それを学んだらどうなるのみたいな、分かりやすいアイコン的なものもないし。例えば、臨床心理学だったらカウンセラーって一つアイコンがあって分かりやすいんですけど、その辺がないのが。それがあつたらいいかどうかって議論はもちろんあるとは思いますが、その辺りがなかなか広がらない理由の一つなのかなって思ったりはします。僕らも薬草とかやっている、やっぱり難しいものも多くて。難しいものは分かりやすくしようと。分かりやすいものは、やっぱり面白くないと人々には伝わらないというのを、ここ数年やりながら思っています。これから文化人類学、せっかく、何しろ僕自身あったからこそ今なんとか生活していていることとか、いろんな先輩とか後輩たちを見てきたので、研究科自体はなくなっちゃいますけど、何かその精神とか、もともと、その人間学みたいな

ところはぜひ残していつてもらえたらなというふうに思っています。以上です。

**笠井：**

役に立つっていうのがすごく難しく、私は学問をしている時に、これが将来役に立つだろうなと思ってやったことが一度もないので。役に立つから何かを研究するというのも、何かちょっと腑に落ちない気がして。役に立たないことを研究している人たちがいてもいい社会がいい社会なんじゃないかなと思って。全部のことが役に立つことで埋め尽くされたら、専門的な知識だけを身に付けるところが大学になっちゃうような気がして。将来役に立つか立たないかっていうのは、本当に死ぬ間際までというか、死んでからももしかして分からないかもしれないんですけど、学んでいく中ですごく豊かな時間を得られたりですか。先ほど、皆さんもお話ししていらっしゃいましたけど、たくさんの人に会えたりですとか、応援してもらったりですとか、そういうことがすごく。私は文化人類学で初めて、たくさんの方が自分の研究に興味がない人も、ある人もたくさん応援してくださったので、これが役に立つの、と聞かれたことは一度もなく、それができたことがすごく驚きであり、素晴らしいことだったなと思うんですね。ちょっとプライベートなことなんですけど、私の母が2年ぐらい前からアルツハイマーを発症しまして、発症してからいつも、自分はなんの役にも立っていないから死にたいみたいなことを言うんですけど、役に立つってどういうことなんだろうなって、いつもそれを言われた時に思う。役に立つって、何か仕事をしてお金を得ることなのか、あるいは人を助けることなのか。なんか、そういうことしか役に立つって言えないのかなって。そういう時に、ここで勉強したこととか、そういうことを通して、役に立つことだけがすべてじゃないんじゃないかなっていう

ふうに考える、すごいきっかけを与えてくれた学問じゃないかなって私は思っています。

**遠藤：**

ありがとうございました。大学院を作った時は、業績の優れた教員が多かったということもありますが、田中先生と文科省、あの当時は文部省ですか、に行って何の変更も求められず、すんなり申請が認められました。設置委員の方からがんばってください、といわれたことを覚えています。

**田中：**

いいですか。田中です。実は、私は2年遅れてこの大学に来たんですね。ですから、私がいなかった2年間にもうそのプロジェクトは何日に作るんだっていうことが決まっていて、事がずっと動いていたわけですね。その段階で、なかなか動かなくなっちゃってスタックしちゃった時に私に来て。それで、「今までのやり方ではだめなので、田中先生やって」なんていう感じで。口の悪い方たちには「もうやる気があるのか、どうするつもりなんだ」って言われながらやってきたんですけど。

**遠藤：**

最後にちょっと一言ずつ、フロアで何か発言をしてもらおうと。

**田中：**

言ってもいいの。

**遠藤：**

はい、大丈夫ですよ。

**田中：**

皆さんのお話、いろんなご意見があったんですけども、伺ってみて、文化人類学は作って良かったんだってつくづく思いました。こういう非常にそれぞれ関心も違う



し、学問に対するアプローチとかそういうのも違うけれども、そもそもマスターコースってというのは学者を作ることじゃないと私は思っているんですね。だからその中から何人かがいい学者になってくれれば、それは大変嬉しいけれども、学者にならなくても、今、学部で勉強したよりちょっと上の段階までいろいろ考えて、ちょっと違った視点からいろんなことをやってくれる、オーガナイズする力を持ってくれる、考えてくれるという、そういう人たちができればいいなというふうに考えて、プログラムを作っていました。幸い、そういうプログラムの作り方で、文部省も、それから審査した先生たちも、何も文句つかなかったんですね。呆れ返るぐらい何も言われなくて。結構ですねっていうようなことで通ってしまったんですけども。でも今日、お話を聞いて、私、今日来て本当良かったと思うのは、皆さんたちがそれぞれ全然違うけれども、でも、こんなふうにいる、ある種、格闘しながら、でも違ったかたちでいろいろアプローチしながら。でも、こんな生き方とか考え方とか、それから文化人類学の、いわば効用ですよ。そういうのを考え出さずして本当に良かったなと私は、一応、その設立に関わった人間の一人として皆さんに感謝したいんです。それをずっと引き継いでくださった先生たちにも本当に感謝したいなと思います。ありがとうございます。

遠藤：

ありがとうございます。じゃあ最後に本当に一言ずつ、何か。本当に各自の発言を聞いて、こんなに語れるようになったっていうことが良かったなと思います。大学院の時間は有益だったと。

水口：

ちょっとさっきの続きじゃないですけど、「役に立つ」ということに関して言わなかつ

たなっていうことで。やっぱり僕自身は、無駄っていうのは本当に人間にとって非常に重要な余白というか、経験の基礎を作ってくれるものだと思います。今の「役に立つことじゃないと駄目だ」っていうのは、イコール「無駄を排せ」っていうことにつながっている。でもそれは人生の貧困を生む。一直線で最短ルートを目も振らず邁進さえすればいいということは、言い換えれば代わりの道の存在と出会うルートを閉ざしてしまうっていうことになってしまいます。道を突き進んで、もし駄目だったら破滅しかないという、そういう人生の設計図を書くことを強要することになると思うんですね。その結果、人はサバイバルするために絶対安全パイの道しか選べなくなるし、他人の無駄も許容できなくなる。そういう思想は、間違いも許容できないハイリスクで硬直した社会、抑圧された人生というディストピアへと直結している。だから教養っていうものであったりとか、無駄に見えることっていうことの豊かさっていうのは、本当はもっともっと評価されなきゃいけない部分で、そういう部分も担っていたはずの大学っていうものをどうやって取り戻していくのかっていうのは大きな課題だと思います。まあ、一番は予算配分と人事権かもしれませんが。日本では高校卒業してすぐ行くのが大学だと思っている人が非常に多いですけども、そうじゃなくて、経験を積んだあとにより深く学ぶために大学に帰ってくるっていうことも含めて、多様な大学の在り方も含めて、模索していくほかないなと思います。

小林：

お願いとしてですが、受け取られ方で語弊があったら申し訳ないんですけども。やっぱり文化人類学科がなくなって、大学院の文化人類学研究科もこれではなくなるわけなんですけども、私としてはすごく寂しいものを感じています。それは皆さんも一

緒だと思っただけです。僕も仕事をしている中で、ほかの大学の先生に会ったり、ほかの学校をみるようになりまして、非常に感じているのが、やっぱりどこも同じような学校になってきているなというところがあります。時代のニーズに合った複合的な分野を学べたり、資格を取得できるような学校の人気が出てきちゃっているというのが正味思っているところです。やっぱり僕らが入学した時に、この文化人類学、臨床心理学とこの2本の柱があったのが非常に特徴的な学校だったと思っていますが、この言い方がちょっと語弊があるかもしれませんが、今はどこの学校とも変わらなくなってきて、どういうふうにここから差別化が図れるのかなというの思います。今日の話の中でも、やっぱり皆さん、フィールドワークを非常に重要視されてきたところだし、特徴にできる要素だと思います。やっぱり僕自身もこれから、文教を出たからこそ、という人材が出てきてくれるとすごく嬉しいなと、社会に出てきてくれると嬉しいなと思いますので、人材の育成、今後も特徴のある学校づくりをお願いしたいなと思います。

水井：

今、気が付いたんですけど、私のことで恐縮なんですけど、実は私通っていた学部のほうも来年から名前が変わるそうで、で、研究科はなくなってしまい、二つともちょっとショックなことがあるなと思ったんですけど。松田先生の講演の副題にもありましたとおり、「このまま終わると思うなよ！」ということを私は言いたいなと思います。というのも、研究科は無くなります。学科も無くなりましたけど、文化人類学の先生がいなくなるわけではありませんので、京都文教大学の教育の中で、文化人類学の要素というのはまだまだ生き続けますし、文化人類学科卒業生も職員の中に何人もいますので、そういったものたちが文

化人類学の心を、後世、後輩たちに引き継いでいけたらいいのかなと思います。

佐藤：

私も少しお願いということになるかもしれないですが、私が本業でやっている研究活動として、戦争の記憶と継承というテーマがあります。これは、満洲や植民地を経験してきた人へのインタビューを通して、その語りを残すことを目的としているわけですが、そういった人もすでに90歳とか100歳近くとか、戦後70年以上経つとそれぐらいになってしまうわけですが、そうすると、どんどんインタビューが困難になったり、亡くなられたりします。そうすると、ご本人たちが所有していたいろんな資料が紛失、消失するケースが多々あります。ご家族がいる場合でも、こういった戦争や引揚げの話聞いたことがないということもよくあって、自分のおじいちゃんが亡くなって、なんでこんなボロボロの資料が家にあるのかよく分からなくて、廃品回収に出されてしまうということを何度も目にしています。これは研究的な目線から見ると、たいへん貴重な歴史的資料がどんどん散逸してしまっている状況であって、それをなんとか防ぎたいと考えています。こうした資料の紛失、散逸をどうにかできないものかと思い、若手研究者と一緒に研究会活動をはじめました。「満洲の記憶」研究会という会です (<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>)。Facebookでも発信しています (<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>)。そこで、もしかしたら皆さんのご家族にも満洲から引揚げた方がいらっしゃるかもしれないですし、もし古い資料を譲っていただけることがありましたら、上記URLからご連絡いただけましたらたいへん嬉しく思います。どうぞよろしく申し上げます。以上です。

保科：

今日は呼んでいただいてありがとうございます。久々に大学院のこととか学部のことを振り返ることができて、呼んでいただいて本当に良かったなというふうに思います。研究科がなくなるっていうことで先ほどもお話がありたぶん皆、寂しい思いをしていますし、何かもっとやれたことがあったのかなって、卒業生っていう意味でもちょっと感じることもあって。ただ、私自身は文化人類学研究科があって、今の生活が本当にあって、本当に感謝でいっぱいな気持ちがありますし、あと、これは個人的な話ですけど、奥さんが文化人類学科の後輩になるので、そういう意味でも出会いがあったということの感謝と、あとはこの、すごく個人的なんですけど今年の1月に子どもも生まれまして、10カ月で毎日可愛いんですけど、そういう意味でもすごくありがたいのと。あと、ちょうど就職をするタイミングの時に、松田先生に一度そんな話を、就職の話をしたことがあって。その時、松田先生から、修了して5年ぐらいしたらそれなりのものになっているよって言われて、その言葉を信じて、今まで自分がやってきたことを信じてやってきて、少なからず、家族3人暮らせるだけの生活はできているっていうことで、本当に大学院で学んだことが本当に今につながっているのかなっていうふうに思っています。この文化人類学研究科がなくなって、その思いとかは、少なからず続いて行ってほしいっていう思いと、また、私、ここにいる先輩方とかと一緒に、自分たち自身もその学んだことっていうのをまた社会に還元してって、それを、名前がなくても思いとしてつなげていくっていうことを、これからはやっていきたいなというふうに思っています。奈良の高取町にいますので、もし何か興味がありましたらいつでも遊びに来ていただいたり、フィールドワークしに来てくださったりしていただけたらと思います。水井さんにはあとで、インターンシップ、

うちも受け入れているので、それを伝えようと思っています。以上です。ありがとうございます。

**笠井：**

今日は本当にありがとうございます。お会いしたこともない先輩とお会いできましたし、こんなにたくさんの方にお話聞いていただいて、本当にありがとうございます。すごく豊かな時間を皆さんと過ごすことができて嬉しかったです。ありがとうございます。

**遠藤：**

ありがとうございます。今日来ていないんですけど、片岡さんは、例えば、修論で東九条マダンのことを書いて、たぶんずっと10年ぐらい運営に関わっていて、授業に来てもらって話をしたことを思い出しました。今の皆の話を聞いていて、いろんなことを思い出しましたが、皆、苦労しながらここまで来たなっていうので、大変嬉しいなと思います。ではちょっと少し時間オーバーしていますが、フロアの方で何か発言ありましたらよろしくお願いします。せっかくの機会ですので。

**森田：**

大学入学も1期生で、大学院も1期だった森田と言います。本業はネパール、ヒマラヤの研究をずっと続けております。人類学の中で役に立つっていうので、今、ネパールが地震にあって、防災がいろんな取り組みというのでいろいろな国でやっているんですけど、そこに専門家の方たちが日本から来ました。でもほとんど撤退しているんですね。結局その専門家の方たちは、防災の技術やそういうものは知っていても、現地の文化や仕組みとか考え方をまったく知らないんで。今、大阪市大の防災研究センターの先生方とプロジェクトを組んでいるんですけども、こちらのほうはNP

O法人を立ち上げてやっています。その時にやはりそれを、現地の人と言っている言い分をトランスレーションすると。専門家の人たちが言っていることを現地の人にトランスレーションすると。そういう何かプラットフォームみたいな役割っていうのを人類学が担っていて、それはすごく見えにくいんですね、外からは。でも、それがなのお互いなんの会話をしているか分からない。お互いの考え方がお互いに伝わらないので、イライラをぶつけ合って、結局、プロジェクトが消えるというのがすごく多くありまして、そういうところに人類学の役割って。本来で言うと、それぞれの人の考え方があるかもしれない。「自分と一緒にの考え方で同じものしかないのかなっていうのと違うものがある可能性を探り出すもの」が役に立つところかなっていうのが今までずっと続けてきた心境です。でも僕としては大学院の時を思い出すと、朝まで皆、論文と格闘したり、いろんなことをしながら。あと、今は違うかもしれないですけど、あの当時、キッチンがありまして、誰がキッチンに立つかによって帰る人と残る人が出てきて、今日はおいしいもの食べられる、今日は残念かもしれないとか。あと、冷蔵庫に僕がプリンを作っていたんですけど、皆さんが冷蔵庫毎回開けるのでなかなか冷えなくて困ったなというのを今思い出したりしています。でも、そういう大学院の中でいろんな可能性を見たり、いろんな生活ができたってというのが、のちのちになって財産になっているのかなっていうのが僕の感想です。ありがとうございます。

遠藤：

ほかにありませんか。今日、ぜひここで言っておきたいことがありましたら。

田中：

同じ1期生の稲垣さん。

稲垣：

すいません、森田君、小林君、水口君と同じですかね、学部1期生で、大学院も1期生の稲垣と申します。そうですね、時間もないことなので、ちょっと。今の皆さんのお話聞いていて思ったのが、役に立つ、立たないって議論ももちろんあると思うのですが、ただ、忘れたらあかんと思うのは、役に立つ、立たないじゃなくて、「役に立たなきゃいけないわけじゃない」ということを文化人類学は包摂しているんじゃないかなってちょっと思っています。立たなきゃいけないって言うふうな思うわけじゃないってのをちょっと忘れないでほしいなど。

田中：

そもそも何にとって役に立つんですかって。

稲垣：

そうですね。

田中：

だから私たちがやっていることだって、いつ、どういうふうな役に立つか分かんないと思うし、結構役に立っていると。

稲垣：

そうですね、役に立っていると思います。ちょっとそれと関係があるので最近思っているのは、よく言われる文化人類学の同時代性っていうのがもちろんあるとは思いますが、もちろん今現在に生きている人たちのことをやっているの、ちょっとSFかもしれないんですけど、ある意味、文化人類学のやっていることっていうのは、我々の未来を選択しないといけないうことなのかもしれないなっていうのはちょっと思っています。要するに今、私が思うのは、今まで震災ですとか原発の事故とかがあつて、自分たちの生活っていうのは実は

もう、もしかしたらこのまま営むことができなかもしれないっていうこととか、あと、技術がどんどん進歩していく、より良くなっていくってことの、もしかしたら限界があるんじゃないかっていうところがちょっと見えたような。例えば、電力の問題とかもあると思うんですけど。その時に、今まで文化人類学が研究してきた、その研究っていうもの自体が、その人たちが営んできたものっていうのが実は我々が未来選択しないといけないことも含まれているんじゃないのかっていうことをなんとなく思ったりもしました。あと、佐藤さんもおっしゃっていたんですけど、介護施設の問題で、この間、台湾にちょっと旅行に行ったんですけど。台湾では介護のスタッフとして東南アジアから来た人たちが、要するに車椅子を押している人たちがもうバールをしている人たちだったんですけど、それって近いうち、日本でも訪れることなんじゃないかなということを思ったりもして。やっぱり未来、自分たちが選んでいかないといけないことも含んでいるのかなって思ったりもします。あんまりまとまっていないですけど。

**遠藤：**

ありがとうございました。大学院を作った時に、学費については学部と同額はやめてほしいということで、何回も田中先生と交渉に行ったのですが、ついに実現しなかったですね。院生の皆さんには本当に迷惑をかけたなと思いますので、お詫びをいたします。それから、西川先生が退職した後、つい最近、京都の占領下の出来事の記憶について本を出版されました。ものすごい反響で、多数の書評が書かれています。やっぱりぜひ姿勢を見習いたいと。これからも頑張っていきたいと思います。どうもありがとうございました。